

会 議 録

会議の名称		令和 8 年度(2026 年度)第 1 回つくば市総合教育会議	
開催日時		令和 8 年(2026 年) 6 月 29 日 (月) 午後 3 時 00 分から午後 5 時 00 分まで	
開催場所		つくば市役所 5 階 庁議室	
事務局(担当課)		教育局教育総務課	
出席者	委員	五十嵐市長、森田教育長、倉田教育委員、和泉教育委員、 坂口教育委員、手打教育委員	
	事務局	《教育局》久保田局長、柳下副教育長、根本副教育長、柳町次長兼中央図書館長、勝村次長兼教育施設課長、森田次長兼学務課長、青木企画監 《教育総務課》山岡課長、小野村課長補佐、椎名係長、鈴木係長、高橋主任 《学び推進課》久松課長兼学校教育審議監、増沢学校教育政策監、東泉課長補佐、伏谷指導主事兼係長、本松指導主事、吉村指導主事 《一般社団法人 Hatch Edu》 甚上、石井	
公開・非公開の別		☒ 公開 ☐ 非公開 ☐ 一部公開	傍聴者数 3 名
議題		教育大綱を浸透させるためには	
会議次第		1 開会 教職員の働き方改革について(報告) 2 議題 教育大綱を浸透させるためには 3 閉会	

＜審議内容＞

教育総務課山岡課長：ただいまから令和 8 年度第 1 回、つくば市総合教育会議を開催いたします。本日の司会を務めます、教育総務課の山岡と申します。どうぞよろしくお願いいたします。本日、議題に入る前に教職員の働き方改革の進捗について、ご報告のお時間をいただければと思います。

教職員の働き方改革については、学校関係者を含めた教育局内での検討や総合教育会議での協議を受け、令和 8 年 3 月の教育委員会で承認をいただき、「つくば市立学校の教職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画」を策定しております。

今年度に入ってから取組ですが、まず学校に関しては、4 月に各学校長へ計画策定の周知を行うとともに、教職員の働き方改革について学校のグランドデザインへの項目反映や目標設定を依頼しました。また、新たに教職員の働き方改革について理解や浸透を深めるためリーフレットを作成しましたので、スクリレや PTA 総会、コミュニティ・スクールなどを通して保護者や地域住民の方への周知をお願いしております。また、市民、保護者向けには、4 月にホームページへ掲載するとともに、6 月 1 日発行の「広報つくば」でも紹介しました。合わせて、6 月 1 日には区会回覧も行っております。

また、庁内に対しても各課へ計画策定の周知を行うとともに、今後、教職員の働き方改革を進める上で関係部局の協力・協議を改めてお願いしております。現在、プロジェクトチームの立ち上げ準備をしており、推進メンバーとしては副教育長をリーダーに、教育局の各課長、そして校長先生をはじめとした先生方を含めたメンバーで構成します。今後、計画の進捗管理とともに、お互い協力しながら課題解決に取り組んでいければと思っております。

今後、総合教育会議においても 9 月に議題として取り上げ、進捗状況をご報告するとともに、先生方にもこの場に来ていただき、現状や課題を共有しながら「どのように働き方改革を進めればよいか」を議論できればと考えてお

ります。報告については以上です。

それでは、今回は「教育大綱を浸透させるためには」という議題で意見交換を行いたいと思います。本日の会議の終了時刻は午後 5 時を予定しております。議事録の作成にあたっては、AI 音声認識を使用いたしますので、ご発言の際にはマイクのご使用をお願いいたします。それでは、ここからの進行は市長をお願いいたします。

市長：その前に、リーフレットは保護者に強めに書いた方がいいという議論がありましたが、その内容は反映されましたか。

教育総務課山岡課長：はい、学校の先生方とも相談しながら決定しました。勤務時間外は留守番電話対応にすることや、学校外のトラブルはご家庭で対応いただくこと、個別相談は勤務時間内をお願いすることなどが盛り込まれています。

市長：現場の「肌感」として、これを配布した反応はどうでしょうか。

教育総務課山岡課長：今後さらに周知を進め、保護者の方々にも「教職員の働き方改革を進める」ことへのご理解、ご協力をいただけるよう努めていきたいと思っています。

市長：これはスクリレだけですか。

教育総務課山岡課長：ホームページや区会回覧、またコミュニティ・スクールの第 1 回会議でも、リーフレットを配布するようお願いしています。

市長：多少圧をかける意味でも、保護者に紙で配ってしまっても良いかなとも思いました。確実に保護者に見てもらう工夫が必要ですね。9 月にはまた、進捗の報告をしてもらうということですので、よろしくお願いします。

さて、今日は「教育大綱を浸透させるためには」ということで、学び推進課と Hatch Edu の皆さんも来てくれています。ずっと議論と実践を繰り返してきて、少しずつ浸透しているとは思いますが、今のうまくいっていることや課題を出し合って、より浸透させるための議論をしましょう。まずはプレゼン

をお願いします。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：学び推進課の伏谷です。よろしくお願いします。学び推進課より、令和 7 年度に実施した「幸せな学校づくりアンケート」の結果と、これに基づいた教育大綱の浸透と幸せな学校づくりに向けた今年度の具体的な取組についてご報告いたします。本日は、単なる数値の増減ではなく、見えてきた本市の課題に対してどのような手立てを講じるか、その方向性を中心に説明させていただきます。

まず、2025 年度の幸せな学校づくりアンケート結果の概要になります。4 年生から 9 年生を対象としたアンケートの回答率は 85%で、約 1 万 2836 人の回答を得ました。全体として多くの項目で昨年を上回る肯定的評価が見られ、教育施策の成果が着実に現れていると捉えています。「学校が楽しい」と回答した児童生徒は 88%で、学校が安心できる居場所になっている証拠です。一方で詳細に分析すると、「学んだことを実生活に生かす実感」が低かったり、「失敗を恐れて正解を急ぐ傾向」があったりと、質の高い学びへの転換にはまだ伸びしろがあります。スライドにある「赤字」は相対的に結果が低いものの、「青字」は高いものとなります。4 つの項目、教えから学びという文脈を拡大させたものが、次のページに載せております。「管理から自己決定」に関する質問項目 22 から 28 について拡大したものです。また、次のスライドは、非認知能力の再認識ということで 29 から 41 までを拡大したものとなります。私たちが目指す教育の羅針盤は、教育大綱に掲げる 4 つの転換と考えております。これまでの学校教育にありがちだった教員が指導して知識を教え込むスタイルから子供たちが自ら問いを持ち、探求する学びへの転換、そして、ルールや時間割で子供を縛る管理から、子供たち自身が環境や方法を選ぶ自己決定の転換だと考えています。これらを支える土台として、自己肯定感や他者受容といった「非認知能力」を重視し、「失敗しても大丈夫」「自分は大切にされている」と思える環境があって初めて、主体的な学びへの転換が実現

すると考えております。

今回のアンケート結果から、相対的に低い6項目を抽出しました。

まず「学び方の自己選択」についてですが、自分に合う学び方が分かっているという数値が伸び悩んでいます。これは授業での自由度や自分の学び方を振り返る時間が不足していると考えられます。対策として、自分のペースで学習を計画する自己調整学習の支援や、ICT 端末などを自ら選択できる指導の個別化を進めていきたいと考えております。指導主事が学校現場で先生方と一緒に授業を作る伴走支援でも促していきます。

次に、試行錯誤の促進です。子供たちが間違えることを恐れ最短ルートで正解だけを求めるという傾向が見られます。この背景には教員側が時間内に予定された内容を教え切らなければいけないという焦りから、子供がじっくり考える時間を奪ってしまっている現状があります。今年度はこの教え切る授業からの脱却を図り、授業の設計を子供自身のアウトプットや対話の時間を中心としたものへ転換していきます。

さらに重要なのは、学級の中に間違えることは新しい発見の第一歩であるという文化を育むことだと考えます。失敗が賞賛される学級づくりを研修など通じて全校に広げていきたいと考えています。

スライド進めまして、「あなたの考えや意見が大事にされていると感じる」について説明いたします。これは子供たちの自己肯定感や、主権者意識の根幹に関わります。具体的な取組として、校則や学校の約束事を子供と教員、時には保護者を交えて、対話でアップデートしていくルールメイキングの活動を推進したいと考えています。身近なルールや学校をより良くするための取組を自分たちで決める経験が、自分の声には社会を変える力があるという実感に繋がると思います。併せて、全校的な対話活動の時間を確保し、人間関係づくりの基盤を固めます。さらに客観的データである「i-check」の効果的な活用、学級経営の課題を早期に可視化して、誰もが安心して発信できる環境を

科学的にアプローチしていければと考えています。私からの説明は以上になります。

学び推進課吉村指導主事：学び推進課の吉村です。ここからは、課題改善の具体的取組を説明します。

1つ目は、学校訪問による授業作り伴走と各教科等の研修講座の開催についてです。児童生徒の問いから始める課題設定目的の明確化、学び方や学習の進め方を子供自身が自己決定する場面の設定、試行錯誤やアウトプット、振り返りの充実など、主体的な学びに向かうための様々な視点を、学校の先生方と共有し、授業の改善に繋がります。

2つ目は、ルールメイキングです。一人ひとりにとって幸せな学校を作るためにできることは何だろうという視点から、児童生徒の思いや考えを引き出し、話し合いによって合意形成と繋がっていきます。写真はモデル校での授業の様子です。モデルとなる授業を参観し、効果的な取組を各学校で展開することで、互いの意見を尊重し合える学級の風土を築いています。

3つ目はグループワークの推進です。児童生徒が安心して自己を発揮できる雰囲気づくりのために、よりよい人間関係の構築を目指し、グループワークを推進しています。具体的には、友達と手でリズムを合わせる手合わせや、サイコロで決まったお題をもとに会話をするサイコロトークなど、相手を理解したり、自己を開示したりする様々なエクスエクササイズが用意されています。こうした取組をすべての学校で、年間を通じて実践することで、互いが大切にされているという気持ちの向上に繋がってまいります。

4つ目は、問いから始める授業づくりの促進です。児童生徒が学ぶ楽しさを感じるためには、自分の気づきや問いが解決したい学習課題と結びつけていることが大切です。そのためには、先生たち自身が良い問いはどのような問いなのかを自問し、子供の問いを引き出したり、それらを学習課題へと結びつけたりする力量を高めていく必要があります。そこで、学び推進課では、問

いから始める授業をテーマとした研修用の動画を、学校と協力して作成しました。この授業動画は、ちょうど今月末に完成し、各校の校内研修等において活用を予定しています。

5つ目は、つくばスタイル科のブラッシュアップについてです。今年度より、つくばスタイル科では、児童生徒の好きや得意を伸ばす、探究学習を進めるための時間を拡充しました。各学校が児童生徒や地域の実態に応じてカリキュラムを編成しやすくなりました。その上で、保護者や地域との協働による、探究学習を実践し、好事例を横展開していきます。また、現在は学び推進課が中心となって、探究学習のヒントとなる効果的な指導方法についてのガイドを作成しております。

学び推進課本松指導主事：学び推進課本松です。ここからは、アンケート項目の改善以外に課として取り組んでいることについてお話をさせていただきます。まずは、教育大綱の確実な浸透に向けた、教育長、副教育長及び学び推進課の一体的な取組について説明いたします。

まず、教育長におかれましては、学校訪問を通じて把握した課題を、全校へフィードバックするとともに、市教育研究会等での講話を通じて、大綱の理念を直接教職員へ発信しております。この教育長の方針を受け、副教育長は、管理職に対して、学校経営や人材育成に関する具体的な助言、支援を行っております。また、私ども学び推進課指導主事は、学校訪問での伴走支援に加え、各種研修講座を通じて、先生方の授業づくりや学級づくりの支援に取り組んでおります。

次に、今年度からの新たな取組である副教育長訪問について、実施の背景やねらい、具体的な取組について説明いたします。これまでは指導主事による授業改善や校内研修における伴走支援を継続してまいりました。一方で、各学校においては、若手教員の育成やミドルリーダーを中心とした組織運営、教職員の多忙感の軽減など、学校経営に関わる構造的な課題も散見されてお

ります。そこで今年度は、学校管理職へのアプローチを通じて、これらの組織的課題を解決し、教育大綱の具現化をさらに加速させるため、副教育長による学校訪問を実施しております。具体的なアプローチをスライドにお示しいたしました。まず副教育長が、学校長のビジョンを丁寧に聞き取りし、アンケートなどの客観的データに基づき、実態を把握します。その上で、具体的なアクションプランの立案までを伴走支援し、定期的な訪問を通じて、実効性を確認しながら、助言を継続してまいります。副教育長が管理職の良き相談相手となり、組織の活性化を図ることで、本市が掲げる幸せな学校づくりをもに実現してまいります。

続きまして、教師同士の対話の場の設定について説明いたします。昨年度末に完全希望制で、教師同士が自由に対話できる場として、つくばティーチャーズベースを試験的に実施いたしました。この取組は、先生方が立場や年齢を超えて語り合う場です。人的ネットワークを構築し、多様な実践を共有することを目的としております。昨年度の試行を踏まえ、今年度も先生方のチャレンジを促せるよう計画しています。

これらの市の方針を受けて、各学校でも大綱の推進に向けて工夫をして取り組んでいます。各学校では、市のアンケートをはじめ、複数のデータから現状分析し、目指す姿や手立てを協議しています。各学校で話し合ったことを、学校改善シートにまとめることで、ビジョンを共有し、校内での共通実践に繋がっています。その他、授業改善や学校経営について、スライドに示しました内容を通して、授業改善と学級経営の充実の両方に力を入れることで、課題の改善に取り組んでいます。本日は、大綱のさらなる浸透に向けて、本課の取組やその方向性について、ご助言をいただけますと幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

市長：ありがとうございました。内容の確認や質問の前に、少し気になったのは、先ほどの「問いから始める授業」の動画は、どれくらいの長さでしょう

か。

学び推進課吉村指導主事：全て合わせて 30 分程度です。

市長：冒頭 10 分程度見ることはできますか。どういうものが研修として使われているのかを見れば、ここでの議論もイメージしやすいと思いましたので。

一般社団法人 Hatch Edu 石井：6 月 30 日に納品予定なので、この場にはありません。

市長：わかりました。動画内ではどのようなことが扱われているのでしょうか。

学び推進課吉村指導主事：先生たちがどんな思いで授業を作っていきたいか、子供たちからどんな問いを引き出したいかというモノログが 2 分程度、その後、実際の授業場面、指導主事との振り返り、そして子供たちがその授業を受けてみての反応など、生の声も入った内容で構成されています。国数理社の 4 教科で配信予定です。

市長：ありがとうございます。質問あればどうぞ。

手打委員：分析について確認させてください。アンケートの対象は 4 年生から 9 年生で 1 万 2 千人ほどですね。このアからカについて、観察されましたか。課題が反映された児童生徒の様子など、それを見出している要因は、どのようにまとめられたのですか。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：我々指導主事が学校を訪問し、子供たちの授業の様子を直接観察したり、先生方とヒアリングや対話をしたりした内容に基づいて整理しました。

手打委員：なるほど。では、先生方から出た特徴的な部分をまとめられたという理解でよろしいわけですね。ただ、4 年生から 9 年生まで一律ではなく、学年ごとの特徴、例えば 4 年生レベルの課題、9 年生レベルの課題などが分かると、より理解しやすいですね。

市長：大事な視点ですね。学年ごとや性別ごとの特徴は、各学校に返されているデータから見えてくるのでしょうか。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：はい、学年や学校ごとの傾向は捉えられます。

幸せな学校づくりアンケートは、各学校によっても学校の実態に応じて、結果が異なっておりますので、各学校でアンケートから読み取れる低い数値に関しては、背景にあるものは何かといったようなことを、各学校で分析した上で、その手立てを講じていけるように、我々学び推進課も訪問させていただく際、伴走訪問支援においても、分析の細かい部分も確認しながら、各学校の実情を捉えているというのが現状です。

手打委員：ぜひ、各校各学年の特性もそのうち共有してください。もう 1 点、教師の対話の場に参加した先生方の反応はどうでしたか。

学び推進課本松指導主事：先生方の振り返りを書いていたきました。普段話す機会のない先生方と話せて有意義な時間になったというお話や、自分のやりたいことが後押しされたというような前向きな振り返りをいただいています。

手打委員：何名ぐらい応募がありましたか。

学び推進課本松指導主事：当初は 16 名程度募集がありましたが、年度末の放課後開催ということもあり、実際は 10 名程度の参加となりました。

手打委員：ということは、かなり熱心な先生方が集まったということでしょうか。

学び推進課本松指導主事：そうですね。

手打委員：わかりました。ありがとうございます。

市長：他にはいかがでしょうか。どうぞ。

坂口委員：アンケートについて、1～3 年生には実施していないのですか。また、質問項目の具体的な言い回しが知りたいです。学校が楽しいと言っても、授業なのか休み時間なのかで意味合いが異なると思います。

学び推進課吉村指導主事：ご質問ありがとうございます。市全体としては 4 年生以上ですが、学校によっては 1 から 3 年生向けに平仮名にするなど言葉を

噛み砕いて独自に実施している例もあります。

坂口委員：とすると、その結果は市全体の結果に追加しているのか、学校単位で集計しているのか。

学び推進課吉村指導主事：あくまでも学校独自で行っている調査になります。

坂口委員：1年生から3年生を市全体として取らない理由は何でしょうか。

学び推進課吉村指導主事：学習用端末でとるため、コンピューターの操作が得意な学年となると4年生以上ぐらいからであれば、確実に取ることができるためです。

坂口委員：わかりました。ありがとうございます。

学び推進課吉村指導主事：もう1点質問のありました項目ごとの設問についてですが、細かな設問につきましては最初のページに反映されております。

手打委員：そうしますと、ここにあるのは質問項目の一部かと思っていましたが、これが質問項目ということですかね。

学び推進課吉村指導主事：そうですね。

手打委員：選択肢はどのように用意されていたのでしょうか。

学び推進課吉村指導主事：項目に対して、4つの程度を表す選択肢が用意されているような形です。

一般社団法人 Hatch Edu 石井：1点だけ補足させていただきます。質問は「学校生活の中の以下の時間について最も当てはまるものを選んでください」という形式で、授業、休み時間、行事、委員会などを4件法、「楽しい」から「楽しくない」までで聞いています。他の項目も、質問内容に応じて「当てはまる・当てはまらない」の頻度を聞くなど、一部選択肢を工夫しています。

手打委員：わかりました。ありがとうございます。

市長：学校が楽しいというのも大問で聞いているのですね。

一般社団法人 Hatch Edu 石井：そうです。シンプルに最初に細かい授業の実感を聞く前に学校が楽しいかどうかを聞いています。

様式第 1 号

和泉委員：今の件に関して、後ほどタブレットでアンケートの画面を見たいです。要はこれだけの数の設問をどう見ているのか把握したいなと思いました。実施時期はいつですか。

学び推進課吉村指導主事：おおよそ、10 月から 11 月にかけての 1 回です。令和 6 年度から経年で取っております。

倉田委員：データの結果は大切ですが、それが一人ひとりの教員にフィードバックされ、自己分析に繋がらないと意味がありません。学校独自で分析や関連性の把握は行っていますか。

学び推進課吉村指導主事：はい、各学校では独自の学校評価アンケートも実施しており、年末に教員・保護者・児童生徒の声を反映させて次年度の教育活動に反映させています。また、各校で「授業改善シート」の振り返りも校内研修等で行っています。

和泉委員：回答率は何％ですか。

学び推進課吉村指導主事：児童生徒の回答率は 85％でした。

和泉委員：タブレットで行うということは S ルームや不登校、特別支援学級の子供たちにも同じ形態でアンケートは届いていると考えていいのでしょうか。

学び推進課吉村指導主事：はい。

和泉委員：回答率 85％とのことですが、残りの 15％の子供たちの置かれている状況に注力すべきではないでしょうか。2024 年に取った時よりは回答率は上がっているのでしょうか。

学び推進課吉村指導主事：上がっています。

和泉委員：わかりました。ありがとうございます。

市長：回答時間は、みんなで取っているわけではないのですか。

学び推進課吉村指導主事：学級活動で必ず取るようにという周知はしております。ただ、この時期に学級閉鎖やインフルエンザなどの影響で回答できなかった子もいます。回答期間を延ばし、各学校に働きかけたのですが、85％が昨

年度では限界でした。

和泉委員：誰が答えていないかの把握はできているのでしょうか。

学び推進課吉村指導主事：Hatch Eduさんは把握できているかと思いますが、教育局では把握はできないようになっています。

一般社団法人 Hatch Edu 石井：補足すると、アンケートの結果自体は、教育局が持っています。しかし、子供がアンケートに回答することで、不利益になってはいけないという発想のもと、子供の名前が分かっている状態ではありますが、学校側にフィードバックはしていません。

和泉委員：答えることができているかできていないかを把握することはすごく大事だと思いますし、答えていない子の属性を把握することは重要だと思います。

一般社団法人 Hatch Edu 石井：現在、他のデータベースとの紐付けにより、属性ごとの分析を進めているところです。

市長：他はいいのでしょうか。

森田教育長：学校へのデータの戻し方について説明をお願いします。

学び推進課吉村指導主事：学校へのデータの戻し方につきましては、学校ごとの PDF を作成いたしまして、それぞれ管理職の先生方にメールでお知らせし、管理職の先生方から、一般の先生方に共有をしていただいて、各校内研修等で、そのアンケートの分析を、対話を通して行うということを各学校で行っております。

市長：それは、どういう濃淡で行っていますか。まず、学校全体で共有されるわけですね。それは、全体の対面で行っている感じでしょうか。

学び推進課吉村指導主事：学校での校内研修はやり方は様々ですが、例えば、4年生の結果を1年生と4年生の先生方が集まって分析をしたり、グループを組んで、対話形式でそれぞれの課題等を話し合い、次年度の教育計画に反映させるという研修の仕方が一般的かなと思います。

市長：例えば、クラスの担任レベルでどれくらい分析しているかはその先生頼みでしょうか。

一般社団法人 Hatch Edu 石井：学年単位です。理由は、小規模校などは、回答が想定できてしまうということもあったので学年単位にしています。また、学年全体で考えて欲しいという教育局の先生方の意見もありましたので、そうしています。

市長：学年の先生たちは集まって議論をしているはずということでしょうか。

学び推進課吉村指導主事：私や石井さん、副教育長も各学校を回ってこのアンケートの分析はどのようにしていますかと聞いたり、実際にワークショップに加わって、講師役を石井さんに務めていただいたりというような学校も 5 校ほどありました。

市長：皆さんの感覚として学校で独自に分析をして、見立てが良いとか、それによって何か対策が生まれているという実感はどの程度ありますか。

学び推進課吉村指導主事：特に、令和 7 年度は、その前の年からの経年変化がありましたので、学校の強みであったり、或いは力を入れるべき部分がよく見えたので、先ほどお話しました授業改善シートの中にも、表れている学校が多いなという印象を受けております。

市長：わかりました。確認はこの程度にして、現場の課題感について聞いていければと思います。浸透させる上での壁は何だと感じていますか。それぞれ先生方から現場を回っている感覚などをお聞きできますか。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：子供が本当に思っていることをどれだけ先生方が理解しているかという部分に課題があるのではないかと考えております。例えば、先生方で、授業改善や学級運営などの手立てはどの先生も行っていると思います。一方で各種アンケートの結果を見ると、子供の声が先生方の取組とズレていたりします。先生方はやっていると思っけていても、そこが子供たちに伝わっていない。その伝わっていない部分が何なのかという

ところを、もう少し細かく、子供の対話を通して見とっていかないと、やっている取組が、効果を示していかない。本質の部分が若干ズレてしまっているのかなと見受けられます。

市長：それは、先生の満足度は高いけど、子供は低いみたいな部分と一致する話でしょうか。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：まさにそうだと思います。

市長：学校の 4 象限の分類に近い話ですね。学校名が出ない形で出せますか。

先生も子供も高ければとても良いが、どちらも低ければ、相当てこ入れが必要になると。少し、簡単に説明してもらってもよろしいですか。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：幸せな学校づくりアンケートの子供たちの結果と、先生方の結果を総合的に分析したものです。エリア 1 に分類される学校は、先生も、子供たちも非常に生き生き、伸び伸びと、学校生活や学びたいことを学び、より充実度が高い学校が、このエリア 1、2 に分類されます。エリア 3、4 とありますが、エリア 4 である一番左下の部分は、子供たちも、先生方もつくば市内で相対的に見て意欲が低下している状態ということになります。エリア 2 の学校に関しては、子供たちの意欲は比較的高いけれども、先生方の意欲が低いという状態です。先生方のやる気、働きがいが必要になってくるのがこのエリアです。次にエリア 3 につきましては、先生のやる気は高いけれども、若干子供たちのやる気が低いのが、エリア 3 になります。エリア 3 については、子供たちの思いをしっかりと酌み取れるようになると、エリア 1 にシフトしていくと思われれます。特に我々が行っている学び推進訪問や学校訪問での伴走支援をより注力することでエリア 1 に上げれるよう取り組んでいます。

市長：ありがとうございます。やはりエリア 1 にいることが理想ということは前提として、学校ごとに個別に対応していくことが 1 つのアプローチになるかとは思いますが。先生方が伴走支援等を行うプロセスの中で、どのような課

題感があるかということを知りたいと考えています。

森田教育長：こちらは、市の平均になりますので、どう頑張っても 4 象限のどこかに入ってしまう。すべてがエリア 1 になることはないですが、そのような中でエリア 1 の中でも大きく改善した学校があるので、その学校をよく調べれば、大きなヒントになるのではないかとということでその部分を調べていこうと動いています。

市長：去年、エリア 4 から 1 になった学校もありましたか。それはさすがになかったですか。森田さんの言う通り、相対的なものであると同時に絶対的な数値の比較もできるので、数値自体を上げていければ良いかなと思います。これらの話題をディスカッション材料として、吉村先生が思う課題感をお伺いできますか。

学び推進課吉村指導主事：伏谷指導主事も申し上げておりました子供たちと学校の先生たちとのズレでしょうか。教えたい、身につけさせたいと思う力と子供たちが実際にやりたい、自分自身で解決したいという思いのズレみたいなものが各授業や学校行事で出てくると、「やらされ感」や「つまらなさ」に繋がってしまうのかなと感じます。そこを全部、子供たちに投げてしまうのではなく、どのように子供たちと対話をして、「どのようなことをこの単元ではやろう」とか、「今日の授業のゴールは何か」と問いかけながら、うまく授業が進んでいくといいなとは考えております。

市長：仮説でいいので、ギャップはどのような部分で生まれる傾向があると感じますか。

学び推進課吉村指導主事：やはり、授業が上手な先生は、子供たちとの対話を大事にしていると感じます。授業参加を実際に行ってみると「今日の課題はこれだよ」「ノートに移してね」といった取組はしません。子供たちに何か気づいたことがあるかを問いかけ、解決してみたいという気持ちを持たせた上で、かつ、授業の課題に取り組んでいくと、一緒になって解決していこうとする。

子供たちと一緒に学ぶ。そのような姿勢を持った先生方が、授業を見ていて、上手な先生だなと思います。

市長：先生方が変わらない要因は何だと思いますか。

学び推進課吉村指導主事：やはり、限られた時間の中で教え切らないといけないという先生方の焦りや不安からではないかと考えています。

市長：以前もお聞きしましたが、授業ができている先生とそうでない先生の割合は肌感覚でどの程度でしょうか。

学び推進課吉村指導主事：難しいですね。できている先生は、2割程度よりは多いかと思います。

市長：そうですか。後で統計的な数字は確認するとして伏谷先生はいかがでしょう。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：51校回らせていただいている中で、1割は大変厳しい見方だと思います。実際に各学校にリーダーになる人材を作ろうということで動いておりまして、私としては2割から3割ぐらいかなと思います。ただ、努力している先生はいます。努力している先生方の数値は、幸せな学校づくりアンケートの結果の「どれだけ理解しているか」という質問項目で6割の先生が理解していると答えています。この数値は私的には少ないと思っていて、100%言ってほしいという思いでした。

市長：分析は大事ですね。やる気はあるのか、それともわからないだけなのか。それによってもアプローチは全く異なりますからね。例えば、学校差みたいなものはあるのでしょうか。

森田教育長：現実にはございます。それら無くすために、根本のほうでも人事面で配置を変えるということを政策に打ち出しています。

市長：ここまでの議論について、根本さんどうでしょうか。

根本副教育長：約2割が、人事異動で変わります。1,700人ちょっといる中で新規採用が100人を超えて、市内外での異動もいるので、2割変わった中での

浸透度合いは、かなりリセットされてしまい、難しさを感じます。ただ、学校の中心的な役割を担える先生方の配置をすることで、学校全体が大きく変わることもあります。小規模な学校ほど、1人の影響力が大きいと、学校訪問をしていて感じる部分があります。人的な部分でのサポートは、必要であると感じています。

先ほどの4指標についても平均値なので、どうしても前後左右が同じ学校数になります。来年以降は、現在の指標を残したまま、パーセンテージの数値で見えていくといいのかなと思いました。

市長：そうですね。それは、データマスターの石井さんがいろいろとやってくれると思いますので、いろいろな角度から分析できればと思います。本松先生はどうですか。同じじゃなくてもいいですよ。

学び推進課本松指導主事：はい、ありがとうございます。私はアンケートで示しましたアの部分です。「自分に合う学び方がわかっている」というところで、先生方一人ひとりに合う学びになるよう工夫してくださっておりますが、教室にはいろいろなお子さんがいます。ですので、みんなが同じペースや方法でというのが難しい状況になっています。それをいかに一人ひとりが学べるようにするか試行錯誤をしてくださっているなと思っています。ただ、昨年からは伴走をさせていただいている中で、先生方の意識はどこの部分を子供たちに任せようかと本当によく考えながら、授業を作ってくださっていると感じます。伸びしろと思い、チャレンジを応援したいと思っている点です。以上です。

市長：どんな応援を一番やっていきたいですか。

学び推進課本松指導主事：一番というのは難しいですが、いろいろな学校を見させていただいているので、良い手立てを伴走の中で提案していくことを心がけています。例えば、「こんな場面でこんな取組をしている先生がいました。こんな子にはこんな方法があるかもしれません」という私からの提案も

ありますが、その学校の先生方、チームで授業を作ってくださっているの、それぞれが取り組んでくださっていることがあります。なので、この場面では、どんなことできそうですかと、一緒に話し合いをすることで良いアイデアが生まれることがあります。

市長：はい、わかりました。今3人からありましたが、副教育長たちからも、学校を回っていて感じる課題感をいただいて、そのあとで皆さんからそれを踏まえての質問やディスカッションにしていこうと思います。

柳下副教育長：私の課題感は、3人の指導主事が伝えてくれたことと重なる部分もありますが、3つあります。まず1つ目は、先ほど4象限の表についてです。結局は1つ1つの学校に課題があって、それぞれその課題は異なるという現実です。この異なる51校の課題に、向き合うことが非常に大変だと思います。51校それぞれの課題が違うのに、1日1校ずつ回っても51日かかってしまいます。1年でどれだけ回れるのかなという思いでいます。できるだけたくさん回数を重ねて回りたいというのが私の中の課題です。

2つ目は、4象限のエリア3への支援です。ある学校の話ですが、子どもたちの様子はあまり良く見えないものの、先生たちは非常に頑張っています。先生方は毎日研修や授業参観を重ねながら、自分たちの学校をより良くしようと努力しています。しかし、その努力がなかなか子どもたちに反映されず、厳しい状況にあります。私はそうした学校を訪れた際に、その意欲を支えているものは何かを観察します。すると、その学校では子どもたちの意欲や学力は低いかもしれませんが、先生同士の仲が非常に良く、職場環境としては働きやすいことが分かります。みんなが共通の課題に取り組つつも、先生たちの意欲は決して下がることなく、頑張り続けているのです。このような学校は、非常に応援したくなります。ただし、このような場合、先生たちの間の良好な関係は理解できても、子どもたちの思いとは乖離していることが課題です。先生方の意欲的な発言があっても、子どもたちはそれに動かされないという

現実があります。つまり、先生たちの思いと子どもの実態には大きなギャップがあり、ここに改善のポイントがあります。2つ目の課題は、先生たちの集団はとても良好ながら、子どもたちの実態をもっとしっかり見ていく必要があるということです。先生たちの思いが強すぎると、かえって子どもたちとの間に距離ができてしまいます。このことに気づかせることが、とても重要です。

市長：ちなみに分類は、各学校には伝わっていますか。自分たちはここにいるとわかるようにはしていますか。

柳下副教育長：見せております。副教育長の訪問で、校長先生にお見せしています。大抵悪い学校さんは、非常にかっかりしますよね。でも現実を知ってもらうためには、見せる必要があると思っています。

市長：そうですね。

柳下副教育長：3つ目の課題として、教員の資質・能力に関する問題を感じています。現在、毎年100人を超える新任教員が各学校に配属されていますが、その初日からつくば市の教員としての方向性をしっかり伝える必要があります。教育長は年度初めに直接お話をされており、すべての教員がその話を聞いています。しかし、アンケート調査の結果、教育大綱を理解している教員は約60%にとどまっているという現実があります。これは教育長がお話しするだけで満足してはいけないことを示しています。この60%を100%に引き上げるためには、人が変わっても様々な角度から教育大綱を教員に示していく必要があります。例えば、教えから学びへの部分に焦点を絞って話をするなど、多様な方法を取り入れながら、今年度は学校ごとに応じた内容で指導を行いたいと、副教育長として考えています。教員の資質・能力向上においては、もちろん核となる教員の育成を重視していますが、それ以外の教員の能力も底上げすることが非常に重要だと考えています。

根本副教育長：1つ目の課題は、教職員組織としての機能を十分に果たすこと

です。吉村指導主事も述べていましたが、子どもたちとの対話が重要であることはもちろんですが、職員室内での先生同士の対話も欠かせません。悩みや課題を自由に話し合える雰囲気をつくるのが、学級や職員室といった組織が円滑に機能するために非常に大切だと考えています。そのためのアプローチが必要です。2つ目は、管理職の考えが一般の先生方にしっかりと伝わっているかどうかです。管理職が熱心に取り組んでいることが、その思いが十分に伝わっていないことが時折見受けられます。教職員からの意見を積極的に吸い上げ、双方向のコミュニケーションを図ることが求められます。また、先生方は教育大綱の「管理から自己決定へ」「教えから学びへ」といった文言は理解しているものの、実際に子どもと関わる際にそれらの言葉が具体的な行動や指導にどう結びつくかが見えにくいことがあります。言葉だけが残し、実践が伴わないことのないよう、常に自問自答しながら子どもと関わるのが重要だと、学校訪問の際には必ず伝えていきます。最後に、先ほど柳下副教育長も触れていたように、働き方改革に関連して教職員のスキルアップが必要です。スキルアップすることで業務の時間短縮が図れ、それが働き方の改善につながります。今後は、働き方改革とスキルアップを同時に進めていくことが大切だと考えています。

市長：久松先生もお願いします。

学び推進課久松課長兼学校教育審議監：はい。私は昨年度まで現場におり、主に中学校での勤務が中心でした。その中で最も課題と感じたのは、子どもたちに何を学ばせたいかという目的に沿った発問を、先生方がどのように考えるかという点です。中学校になると学力の差が広がりやすく、そのため指導がどうしても「教え主体」になってしまう傾向があります。これに対して、子どもたちが主体的に学べるような問いかけが重要だと考えていました。また、中学校の場合、受験がゴールの一つにあるため、点数を上げることも求められます。しかし、同時に子どもたち自身に学びを委ねるという勇気も今後必

要だという課題感を感じていました。これらの考えは伝えてはいるものの、現場での実態とはまだ大きなギャップがあると感じています。以上です。

市長：ありがとうございます。増沢先生からもよろしいでしょうか。

学び推進課増沢学校教育政策監：学び推進課の増沢です。私は大きく2つの課題を感じています。1つ目は、「学校が楽しい」ということを最も大切にしている点です。その要因として、「学校に安心できる居場所があること」と「自分の考えや意見が大切にされること」という2つのアンケート項目が大きく関わっていることが分かっています。このことから、いじめのない、違いを認め合える環境づくりが非常に重要だと考えています。したがって、教職員には子どもの権利を改めて認識してもらい、教育長も言及したようにグループワークなどを通じて良好な人間関係づくりを促進する取組を大切にしたいと思っています。

2つ目は、教育大綱で重視されている「問いから始める学び」の促進です。先生が課題を与えるだけでは、どうしても子どもが受け身になりがちです。しかし、子ども自身の問いから学びが始まることで、主体的に学ぼうとする姿勢が生まれます。これは自分の人生を自分で舵取りする意識の芽生えに繋がります。これは自分の人生を自分で舵取りする意識の芽生えに繋がります。これは自分の人生を自分で舵取りする意識の芽生えに繋がります。今回は、研修動画の作成も進めており、それを活用しながら教職員の教育観も変えていければと思います。

市長：はい。ありがとうございました。いろいろと出ましたので、今、先生方から聞いたことに対しての質問や意見、提案などあればどうぞ。

手打委員：いろいろな学校の取組についてお話を伺い、大変まい考になりました。ただ、今日の会議を通じて少し違和感を感じた点があります。教育大綱を基にしてつくば市の学校改革を進めるにあたり、子どもたちと最も接する先生方が意欲を持ち、力量を高めることは非常に重要だと思います。一方で、先生方は年間のカリキュラムや授業時間をどうこなしていくかという課題に常に直面しています。その結果、時間内に授業を完結させようとする、子ども

たちと十分な対話や関わりの時間が確保できない現実もあるのではないかと感じています。この問題を解決するために、各学校では校長先生を中心に教育目標を設定し、その目標を各学校のカリキュラムにどう反映させているのかが重要です。しかし、今日の議論では、校長先生方が教育大綱をどのように捉え、学校のカリキュラムにどう生かそうとしているのかが見えてこない印象を受けました。先生方一人ひとりの努力や能力だけでなく、それを支える学校経営や組織としての合意形成が鍵となります。教育大綱のすべての目標を全校で達成する必要はなく、それぞれの地域や学校の状況に応じて重点を置くべき分野を決めることが望ましいと思います。ただ、現状の議論ではその具体的な方向性が十分に示されていないように感じました。

市長：これは誰が答えましょうか。森田さん、どうでしょうか。校長の役割はどうなっているのか。

森田教育長：まさに手打先生おっしゃった通りだと思います。副教育長ともよく話しているのは、今年の重点をしっかりと学校内で共有し、学校の教育目標としてしっかり掲げ、実践できるようにすることが、最も大切という共通理解のもと、各校を回っていただいています。なので、教育大綱から学校の教育目標、学年の目標、個人の目標とすべてが連鎖するような考え方で取り組んでいます。

市長：副教育長は、校長とコミュニケーションをとる機会が多いという認識で合っていますか。

森田教育長：そうですね。

柳下副教育長：手打先生がおっしゃったように、教育大綱の理念に向かって進むためには、各学校の教育目標がその理念に沿ったものでなければ、一貫性が保てません。方向性が異なれば、統一感が失われてしまいます。そのため、校長先生が理念の理解と実現において最も中心的な役割を果たすことが重要だと考えます。また、教育理念の実現は、単に掲げるだけではなく、各学校の

課題解決に取り組むことが必要です。今年度は、課題の解決に向けて校長一人で考えるのではなく、職員全体で組織の力を生かし、何ができるかを協議し取りまとめていきます。この取組は、学校改善ワークシートなどに反映され、今年度どのような課題に取り組むかが教職員にわかりやすく示される仕組みとなっています。したがって、教育大綱の理念と学校目標は別物ではなく、しっかりと関連づけられています。

手打委員：この学校改善シートというのは、どのように作られているのでしょうか。今は作成中ですか。

柳下副教育長：いえ、今年度は5月に提出期限を設定しています。これまでは単年度ごとに各学校が独自に計画を立てていました。しかし、幸せ度アンケートの結果や経年変化が明らかになってきたことから、昨年度のうちに各学校の課題を把握し、分析することが可能となりました。具体的には、昨年度末に副教育長が校長と面談を行い、学校改善シートの作成に向けて見えてきた課題の整理と分析を実施しました。こうしてまとめられた内容を基に、今年度の学校改善シートを作成する流れを初めて確立したのです。この仕組みによって、たとえ校長や教頭、その他職員が異動で変わっても、昨年度の課題を引き継いで今年度の計画に反映させることができ、計画の途切れや矛盾なく継続的な改善が図れると考えています。

手打委員：「教育大綱のさらなる浸透に向けて」がテーマです。今日の話の大半は、授業の構築や先生方の問題に関する内容が多かったと思います。しかし、私としては、教育大綱を浸透させるためには、組織として各学校が進めていく上で、「学校改善シート」が教育大綱とどのように繋がっているのかを明確にすることが重要だと考えています。現状では、この部分がブラックボックスとなっており、よくわかりません。したがって、浸透に向けて具体的な方策として、我々が「学校改善シート」と教育大綱の関係を理解し、必要に応じて各学校へ具体的に働きかけること、つまり何を投げかけていくのかを明確に

していくことが一つの方法だと思います。

市長：学校名とかはいらないので学校改善シートにどんなことが書かれているか確認できますか。補足すると、教育大綱の開始当初、森田教育長は「校長が重要だ」という考えから、校長の経営力を高めるアプローチに最初に取り組ました。しかし、校長だけの力では難しいという結論に至り、授業の変化に至るにはより総合的なアプローチが必要だという認識に至っています。このように、施策の方向性については試行錯誤の中で行き来している状況です。

柳下副教育長：校長がまず教育大綱を最も深く理解することが非常に重要です。

これまでも授業改善シートは存在していましたが、今年度と過去の違いは、校長の強い思いが反映されている点にあります。校長は教育大綱の最も理解者として、その思いを描いています。一方で、授業改善シートや学校改善シートの作成は教務主任や研究主任が担当することが多いため、これらの主任が教育大綱をしっかりと理解していなければ、校長の思いと現場で作られる改善シートが乖離してしまいます。連携が取れていないと、別々のシートができあがり、統一された方向性を欠く恐れがあります。そこで今回の学校改善シートでは、「幸せのアンケート」の結果を分析し、自校の課題を正確に把握して共有することを重視しました。これにより課題を明確化し、全員で共有しながら反映させる取組を、昨年度に実施し、今年度へと繋げています。

市長：学校改善シートは校長が作るのでしょうか。

柳下副教育長：教務主任や教頭先生です。

市長：授業改善シートは。

柳下副教育長：研究主任や教務主任です。

市長：授業改善シートも各先生が作るわけではなく、学校では 1 枚しかないわけでしょうか。

柳下副教育長：授業改善シートは各先生が作ります。

市長：学校としての授業改善シートは、学校で 1 枚ということでしょうかね。

他にあれば、どうぞ。

坂口委員：教育大綱を浸透させるためのアイディアとして、私の中で2点お話ししたいと思います。まず一つ目は、今年小規模特認校となった栗原小学校の事例です。栗原小学校は教育大綱を目指して大きく変革を進めており、保護者や子どもたちの声が多く届いています。フリースクールに来る子どもたちが減少したのは、学校が楽しくなったことが大きな理由だと思われます。ただ、子どもたちにはそれぞれ個性があり、全員が楽しんでいるわけではなく、様々な意見があります。子どもたちが楽しいと感じる理由としては、グラウンドを自由に使えたり、帰り道に自由に話せたり、授業の必要なことを終えた後に自由な時間があり、友達と教え合える環境が挙げられます。これらは大きなことではありませんが、子どもたちにとっては大切な要素です。一方で、大人や先生方は「学校はこうあるべき」という固定観念を持ちがちで、子どもたちの感じている窮屈さや不自由さに気付かないこともあります。子どもたちは、「どうせ怒られるからできない」といった我慢や諦めを感じており、その背景には自分の意見が尊重されない日々の積み重ねがあると感じました。特に印象的だったのは、教室で先生が子どもたちの意見をしっかり聞き、尊重していることを子どもたちが実感している点です。これは大人の職場環境に例えると、辛い状況でも自分の声が届く職場なら頑張れるのに、声が届かないと諦めてしまうのと同じで、学校生活においても非常に重要なポイントです。私は学校以外の場で、学校生活を諦めてしまっている子どもたちの声を多く聞いており、その原因の一つに声が拾われないという経験の積み重ねだと考えています。また栗原小学校では、低学年の子どもたちは新しい教育の形を柔軟に受け入れ楽しんでいるのに対し、高学年は従来のやり方に馴染んでしまい、新しいやり方に戸惑っていると感じました。このギャップを踏まえると、教育大綱のような新しい取組は、低学年から段階的に進める必要があると感じます。幼児教育からの繋がりを基に、基盤ができていな

いと高学年での急激な変化は難しいのです。さらに、教育現場の雰囲気を決定づける一因として、保護者の感覚が大きいと考えます。このため、教育大綱の浸透にあたっては、学校や教育局の努力に加え、保護者への丁寧な説明や理解促進も不可欠です。特に高学年の保護者は受験など将来への不安から厳しい課題を求める傾向があり、その期待に応えながら教育大綱の理念を伝えていく必要があります。このように、教育大綱を浸透させるためには、低学年や幼児期から保護者も含めた広い層に働きかけることがもう一つの重要なアイデアだと考えています。

市長：結構悩ましい部分ですが、保護者問題はどうか。

森田教育長：今回は資料にないですが、そこは本当にすごく意識しているところですよ。私が子供と対談したものを昨年記事にしたのですが、先生方や保護者の目になかなか届かなかったもので、そういったことを保護者にもっともっと伝えることが大事なポイントではないかということで今取り組んでいます。

市長：今回の会議に間に合うように、僕もシェアしました。本当に、しっかり取材をして Hatch Edu の皆さんがまとめてくれています。結構なボリュームになりますけど、先生方が頑張っている内容などよくわかります。そして、いろいろな方法で広報を頑張らなくてはいという部分ですね。倉田先生どうぞ。

倉田委員：別の観点からですが、データを見て感じる課題として、授業改善における「個人追及」はつくば市ではよくできていると思います。ただ、最終的な共有化が課題だと感じています。子ども同士がこれまでの取組を共有して、自分の成果の継承ができる環境が整うことは、自信に繋がるだけでなく、お互いを理解し合い、今後の改善策を話し合う機会にもなると考えています。この点の改善が必要だと思います。また、学校としては教員同士の関わりが非常に重要であり、そのために研修の充実や情報共有の推進が不可欠だと思います。その際、トップダウンではなくボトムアップの考え方で、教員の意見

を管理職が丁寧に吸い上げ、一緒に課題や対応策を話し合い、納得感を持って全員が一丸となる体制づくりが必要です。これが組織力の向上に繋がり、学校の体制を大きく変えていくと考えています。

市長：おっしゃる通りですね。学校改善と授業改善って別のシートでしょうか。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：同じです。今年度の学校改善ワークシートは、各学校の校長先生が「どのような子どもを育てたいか」をまず明確にすることから始まります。この目標設定は教育大綱の理念を踏まえて行われます。次に「子どもの現状」については、「幸せな学校づくりのアンケート」だけでなく、全国学力・学習状況調査や学校独自の学校生活アンケート、「i-check」など複数のデータを活用して分析します。さらに、教職員や授業の現状も併せて各学校で詳細に分析します。右側の欄では、子どもや教職員のどのような変化を目指すかを記入し、校内研修や教員組織の改善についても最後に書き込む構成です。重要なのは、この改善シートが一部の管理職や代表者だけで共有されるのではなく、全教員が内容を理解し、自らの授業や学級経営に活かすことです。これにより子どもたちが安心・安全に過ごせる環境作りを目指します。また、「i-check」などのツールを使い、細かい取組の進捗も可視化し、教育大綱や学校目標と取組が統一されるよう、今年度ワークシートの構成も見直しました。書き方のガイド例も用意し、5月には全校に配布済みで、それぞれの学校が実態に応じた改善シートを作成し、現在展開中です。

市長：これは校長と相談しながら、教頭が作ったのかと思いますが、すべての先生の手元にあるという認識でよろしいですか。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：そうですね。学び推進訪問において授業を公開する先生方には、学校改善ワークシートを基にした授業版のワークシートを作成していただいています。これらは教員がいつでもまい照できる形で共有されており、副教育長や私たちの訪問時にも活用しています。今年度は特に、作成された学級改善シートをベースに、管理職への面談や教員への声か

けを強化し、指導の一貫性を保つ取組に力を入れています。

市長：わかりました。ありがとうございます。手打先生いかがですか。

手打委員：このワークシートはどの学校にもあるような一般的なものに見えてしまいます。教育大綱に基づいて作成・浸透させるのであれば、各学校で作る際に教育大綱との関連性がもっと明確に示される必要があります。しかし現状では、その関連が見えてこないため、教員の方々が「つくばの教育大綱に沿って授業や学校運営を行っている」という意識が十分に育っていないのではないかと感じます。いかがでしょうか。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：今年度は、授業改善ワークシートの作成にあたり、教育大綱の理念や「幸せな学校づくりアンケート」の結果をしっかりと反映させるよう各学校に依頼しています。そのため、昨年度よりも教育大綱の意識の浸透は進んでいると感じています。各学校は、教育大綱のどの部分に重点を置くかを工夫して書いているところもありますが、一方で、今後さらにワークシート自体をより良い形に改良し、教育大綱との繋がりをより明確に示す工夫の余地があるとも感じました。

市長：ありがとうございます。大事な視点ですね。もちろん意識しながら書いているはずですが、しっかり紐づけられているか、担保できた方が良いですね。和泉さんどうですか。

和泉委員：発言する前に 1 つ質問したいのですが、学校訪問はどのようなタイミングで、例えば何時からどのような形で行われているのか、簡単に教えてくださいませんか。具体的には、「今日は国語の授業を見に行く」といった特定の授業を対象に訪問するのか、それとも朝から終日訪問するのか、そのあたりの流れなどを知りたいです。

学び推進課吉村指導主事：我々が実施している学び推進訪問は、約 1 ヶ月半前に学校から打ち合わせカードを提出いただくことから始まります。そこから伴走訪問がスタートし、訪問当日までに指導主事が 2 日程度学校を訪問しま

す。この際、授業改善ワークシートを基に、焦点となる授業の先生方と対話を重ね、児童生徒の力をどう伸ばすかを具体的に話し合いながら授業計画を共同で作成します。学びのデザインは、教科の資質・能力の目標も踏まえて作り上げ、チーム編成による共同立案形式で進めます。時間が足りない場合は Teams 等のオンラインツールを活用し連絡を取り合いながら準備を進めます。訪問当日は午前 9 時頃に学校に到着し、まず校長や管理職との懇談を行います。その後、焦点授業や公開授業を参観し、午後の校内研修では指導助言や研究協議に参加します。最後に再度懇談を実施し、訪問後の具体的な対策や校内研修で重視すべき点を確認して訪問を終えます。

和泉委員：なるほど。とてもよくわかりましたありがとうございます。ということはやはり授業のための伴走、授業の改善のための伴走ということでしょうか。

学び推進課吉村指導主事：授業の改善の中にその中に教育大綱の実現ももちろん、含まれているというふうな捉えをしていただきますと、うれしいと思います。

和泉委員：わかりました。全体アンケートから抽出された課題の一つに「意欲の低さ」や「子どもたちの受動的な態度」があります。このことから、学びの基盤となる学級づくりや学級風土が弱いのではないかと強く感じました。例えば、坂口委員が指摘したように、子どもたちが自由に校庭で遊べる環境や、「先生が自分の話をよく聞いてくれる」という安心感が不足していることが浮き彫りになっています。アンケートの「先生と話す時間」が低評価であるのは、子どもたちの本音が反映された結果と考えられます。良い授業を行う前提として、安心して自己意見を表明できる居場所づくりや、ルールメイキングを含む自己決定の支援がもっと重視されるべきです。どんなに授業改善を進めても、この基盤がなければ真の学びには繋がりません。具体的な対策としては、特別活動や学校行事、朝の会や帰りの会での取組に注力することが

挙げられます。学びの改善とともに、学ぶための空間づくりを両輪として進める必要があります。振興基本計画の会議で行った子どもへのアンケートは、数値化しにくい子どもたちの思いを反映しており、その視点も踏まえつつ、これからの特別活動や課外活動の具体的な取組を深めていくべきだと強く感じました。

市長：非常に大事な視点ですね。ファウンデーションの部分が整っていないとなかなか上に行かないというのは、非常に重要な問題提起だと思います。どう思いますか、教育長。

森田教育長：本当その通りです。私たちはよく「楽しい」という言葉を使いますが、子どもたちが本当に求めている「楽しさ」と先生方が考える「楽しさ」にはズレがあるのではないかと考えています。このズレがあると、いくら努力しても数値的な成果は上がりにくい。子どもたちが求める楽しさを深く理解することが必要です。もし子どもたちの楽しさが単に「活動が楽しい」という単純なものであれば、それ以上の意味や価値を授業の中で考えさせる必要があります。このズレをなくすことが第一歩であり、そのために自己決定の感覚を授業だけでなく学校生活全体に浸透させることが重要だと思います。また、学校の状況を示す4象限の例では、子どもたちが楽しそうに見えても評価が低い学校もあり、そのようなズレをすべての学校で正していく必要があると感じています。

市長：校庭で自由に遊べるのが、子供にもたらす影響を過小評価してはいけないということでしょうね。

森田教育長：きっと小さい事象が大事なんでしょうね。

和泉委員：個人的に気になっているのは、過度に規律や規範を重視しすぎているかという点です。学習スタンダードとも呼ばれる「良い子の決まり」は、自由を保障するために必要な規律であるものの、その規律が過剰であったり、理由の説明が不十分な場合があります。例えば、校庭の利用制限について、

「この場所ではこの遊びだけ」「特定の曜日は特定学年だけが遊べる」といったルールは、安全確保の観点から設けられているものの、子どもたちに一方的に課されているのではないかと懸念しています。先生方は、経験や暗黙知に基づいて学級をまとめるためにこうしたルールを運用していると思いますが、その必要性や運用方法について改めて見直すことが重要だと、日々強く感じています。

森田教育長：そこは大分意識してやっていると思います。ルールメイキングを進めることが、「幸せな学校づくり」のルール作りの出発点となっています。子どもたちの意見を取り入れようとする基本姿勢は以前よりもかなり出てきているものの、先生方によって感覚にまだ差があるのも事実です。例えば、つくばでは授業者約 1,300 人のうち約 200 人が新任教員であり、新しい先生が理解し、実践できるようになるまでには時間がかかる状況があります。私自身、春先に訪問した際には前年より改善が見られたものの、人事配置が変わった今年度初めでは一部で逆に低下している様子も感じられ、3 歩進んで 1 歩下がるような感覚を覚えています。そのため、新しい先生も含め、繰り返し基本的な考え方やスキルを投げかけ、対話を重ねていく必要があると感じています。過去の理解だけに頼らず、持続的に取組続けることが重要だと改めて認識しています。

市長：少し思ったのは、学校がどのようなことをやっているか、我々にはわからないじゃないですか。なので、学校訪問に、教育委員行ったら邪魔ですか。

森田教育長：やってもらうつもりではいたので、やっていいと思います。

市長：ありがとうございます。みんなで一緒に考えながら進めていければと思いますし、先生方も非常に熱心に取り組まれていることは理解しております。教育委員や我々も評価を行う立場ではないですが、一緒に学校づくりを進めていけるかを考える機会にできればいいなと考えていますので、ぜひそれはやりたいなと思います。ただ、参加者が多すぎると先生方もプレッシャーに

感じてしまうかもしれませんが。

森田教育長：現状を見てもらったほうがいいと思います。

市長：そうですね。ここだけで議論しても、どうしても表面的なもので終わってしまう気がします。私自身はなかなか参加できないかもしれませんが、皆さんのご都合を最優先にさせていただき、ぜひ進めていただければと思います。

和泉委員：訪問の一環として、授業だけでなく、運動会や合唱コンクールなどの学校行事における子どもたちの関わり方や活動内容、運営の様子も見られたら良いなと思います。校庭をふらっと覗いて「こんな感じなんだ」と把握するだけでも、意味があると思います。

市長：もし案内をしなくてよいのであれば、当日の先生方の負担は非常に軽くなると思います。ただ、現状では「お茶を出さなければならない」といった慣習などがあり、その点が負担となっているため、そうした不要な対応はやめたいと考えています。

和泉委員：地域のおばさんがふらっと行くような感じで見られれば良いなと思います。

市長：学校がそれを受容できるかな。

森田教育長：行事とかルールメイキングの時間とか、特徴がある活動をしている授業一覧を用意し、お知らせする形が良いかなと考えています。

和泉委員：やはり子供の表情をすごく見たい。そこがないと「この数字だけを見ても…」と思ってしまいます。

市長：すいません、結構時間延びてしまいましたが、ずっと伴走している石井さんから最後何か一言あれば。

一般社団法人 Hatch Edu 石井：では、一言だけ。本日の話を伺い、改めて感じたことですが、教育大綱のビジョンや文面はすでに皆さんが読み、それぞれ試行されていると思いますが、それを実現していくための具体的なストーリーとしての落とし込みや各施策がどのように繋がり、どの方向性を目指して

いるのかを効果的にコミュニケーションしていくことが非常に重要だと感じました。ここでの議論を通じて、一人ひとりの先生がつくば市の一連の取組を文脈として理解し、大綱の実現をさらに推進するためには、その戦略や方向性のストーリーづくりが欠かせません。また、いつまでにどこまで達成するかという具体的な目標設定も必要かもしれません。このような内容をどのように共有・伝達していくかが、今後の大きな課題であると考えています。以上です。

市長：はい。ありがとうございました。いろいろとこういう場で話すことが大事だし、とても皆さんがいろんな取組にチャレンジしてくれていることもよくわかりました。我々も一緒に前に進んでいけるようにと思いますので、引き続きよろしくお願いします。

教育総務課山岡課長：それでは以上をもちまして、本日の会議を終了いたします。次回の議題については ICT 教育をテーマに8月下旬の開催を予定しております。本日はお忙しい中、ありがとうございました。

令和 8 年度(2026 年度)第 1 回つくば市総合教育会議次第

日時：令和 8 年(2026 年) 6 月 29 日 (月)

午後 3 時 00 分から午後 5 時 00 分まで

場所：本庁舎 5 階 庁議室

1 開会

教職員の働き方改革について（報告）

2 議題

教育大綱を浸透させるためには

3 閉会

事務局：教育局教育総務課

つくば市総合教育会議 構成員名簿

職 名	氏 名
市 長	五十嵐 立青
教 育 長	森田 充
教育委員会委員	倉田 廣之
教育委員会委員	和泉 なおこ
教育委員会委員	坂口 まり
教育委員会委員	手打 明敏

第1回総合教育会議

「教育大綱を浸透させるためには」

**幸せな学校づくりアンケートの結果
及び今後の教育大綱の浸透に向けた取組**

令和8年6月
学び推進課

1 アンケート結果

2025年 幸せな学校づくりアンケート 市全体の結果と昨年からの差分

相対的に低いものが赤く、
高いものは青で表記！

昨年よりプラス
昨年よりマイナス

カテゴリー		質問項目	市全体(R7年度)の結果				昨年からの変化(Pt)	
			1	2	3	4	1と回答	1または2と回答
			最も肯定的			最も否定的		
① 充実感 学校が 楽しい	学校生活の 充実感	1 学校が楽しい	50%	38%	8%	3%	0.9	0.9
		2 授業の時間	28%	48%	17%	7%	0.9	0.8
		3 児童・生徒会活動(委員会活動など)	38%	39%	15%	7%	1.0	1.3
		4 休み時間	80%	17%	2%	1%	0.7	0.4
		5 クラブ活動や部活動	71%	21%	5%	3%	0.7	0.5
		6 給食の時間	63%	30%	5%	2%	0.4	1.1
		7 学校行事(運動会、文化祭、音楽会など)	72%	22%	4%	3%	0.4	0.6
		8 友だちと一緒に過ごす時間	87%	11%	1%	1%	0.1	0.2
		9 先生とお話する時間	44%	40%	11%	5%	-0.5	0.3
② 教えから 学びへ	授業の充実感	10 授業では、夢中になって学んでいる時間がある	41%	40%	14%	5%	0.4	0.0
		11 学校の授業を通して学ぶ楽しさを感じている	38%	39%	17%	6%	1.4	0.5
		12 できるようになった、わかったと思える授業が多い	46%	39%	11%	4%	-0.5	-0.3
	個別最適な 学びと協働 的な学びの 往還 (主体的・対 話的で深い 学び)	13 授業では自分の生活に結びつけて考えようとしている	30%	46%	20%	5%	1.4	1.0
		14 授業で学んだことを、生活の中でいかそうとしている	36%	43%	17%	4%	0.7	0.5
		15 学校の授業では新たな発見や気づきがある	44%	43%	11%	3%	0.4	0.6
		16 授業では「なぜ」「どうして」「どうやって」という気持ちをもって学んでいる	42%	40%	14%	4%	0.5	0.4
		17 授業では、試したり考えたり(試行錯誤)を繰り返しながら、課題の解決に取り組んでいる	40%	42%	15%	3%	0.5	0.0
		18 つくばスタイル科では、自分が感じた疑問などを解決する学びの機会がある	39%	42%	15%	4%	0.9	0.3
		19 授業では、学習の方法やペースを自分で選んでいる	46%	39%	12%	3%	1.4	0.8
		20 授業では、自分が必要な時に、仲間と協力しながら学んでいる	59%	32%	7%	2%	-1.8	-0.3
③ 管理から 自己 決定へ	子どもが自己 決定できる 学校環境	21 授業では、いろいろな人と学ぶことで、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができている	48%	39%	11%	3%	-0.4	-0.1
		22 学校には、自分の気持ちを分かろうとしてくれる仲間がいる	65%	28%	5%	3%	0.3	0.7
		23 学校には、自分の気持ちを分かろうとしてくれる先生や大人がいる	54%	34%	8%	4%	1.2	0.9
		24 学校には、安心できる居場所がある	54%	31%	9%	6%	0.5	1.0
		25 自分の考えや意見を伝えやすい学級・学年だと思う	45%	39%	12%	5%	1.0	0.7
		26 あなたの考えや意見が大事にされていると感じる	37%	42%	15%	6%	2.1	2.0
		27 学級や学校をよりよくするために、一人一人の意見や考えを大切にしながら、みんなで話し合っている	46%	40%	11%	4%	0.1	0.9
		28 みんなのがんばりや挑戦を応援している学級・学年だと思う	55%	34%	7%	3%	0.2	1.0
④ 認知能力 偏重から 非認知能力 の再認識へ	幸せに向かう ために育 んでほしい 非認知能力	29 日々がんばるような、自分なりの目標を持っている	50%	34%	11%	5%	0.5	0.0
		30 目標に向かって、自分を振り返りながら進めている	43%	37%	15%	5%	1.1	0.1
		31 分からないことや、できないことがあったとき、なんとかしようと思う	55%	35%	7%	3%	-0.5	-0.2
		32 どんな学び方や進め方が自分には合うのかが分かっている	42%	36%	16%	7%	-0.4	-0.2
		33 自分には「よい」と思えるところがある	52%	32%	10%	6%	0.8	0.4
		34 自分を大切に思っている	52%	32%	10%	5%	0.7	0.5
		35 自分とは違う考えや気持ちをもっている人の話でも、最初から否定しないで聞くことができる	56%	36%	6%	2%	0.4	0.2
		36 たいていのことには、「自分はきっとできる」と思って取り組んでいる	43%	39%	14%	5%	1.5	0.7
		37 自分は、失敗したとしても、その経験を次に生かそうという思いがある	47%	37%	12%	4%	0.7	0.7
		38 挑戦しようとする気持ちをもって、様々なことに取り組んでいる	48%	36%	12%	4%	1.0	0.8
		39 学校で困ったことがあったとき、誰かに助けを求めることができる	50%	34%	11%	6%	0.7	1.1
		40 将来の夢や希望をもっている(あんな人になりたい、こんなことがしたい、こんな仕事につきたい など)	58%	24%	10%	8%	-1.0	0.2
		41 地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う	42%	39%	13%	6%	0.1	0.3

- 市全体としては多くの項目で改善傾向
- 昨年より減少したのは以下の項目
 - できた・わかった授業の経験
 - 協働的な学びの経験
 - 自己調整、自己実現
- 絶対値をみると、昨年同様に
 - 「授業の時間(の楽しさ)」
 - 「授業の充実感(学ぶ楽しさ)」
 - 「本物の学び」
 - 「探究的な学び」(試行錯誤、つくスタ)
 - 「民主的な学校環境」(あなたの考えや意見が大事にされる)の項目を中心に伸びしろ

①幸せな学校づくりアンケート 「充実感」

相対的に低いものが赤く、
高いものは青で表記↓

肯定的 ← → 否定的

		市全体				
カテゴリー	質問項目	1	2	3	4	1+2
学校生活の 充実感	1 学校が楽しい	50%	38%	8%	3%	88%
	2 授業の時間	28%	48%	17%	7%	77%
	3 児童・生徒会活動(委員会活動など)	38%	39%	15%	7%	78%
	4 休み時間	80%	17%	2%	1%	97%
	5 クラブ活動や部活動	71%	21%	5%	3%	93%
	6 給食の時間	63%	30%	5%	2%	93%
	7 学校行事(運動会、文化祭、音楽会など)	72%	22%	4%	3%	93%
	8 友だちと一緒に過ごす時間	87%	11%	1%	1%	98%
	9 先生とお話する時間	44%	40%	11%	5%	84%

学校が楽しい 1: 50% 1+2: 88%

②幸せな学校づくりアンケート 「教えから学びへ」

相対的に低いものが赤く、
高いものは青で表記↓

肯定的 ← 否定的 →

カテゴリー		質問項目	1	2	3	4	1+2
授業の充実感		10 授業では、夢中になって学んでいる時間がある	41%	40%	14%	5%	81%
		11 学校の授業を通して学ぶ楽しさを感じている	38%	39%	17%	6%	77%
		12 できるようになった、わかったと思える授業が多い	46%	39%	11%	4%	85%
個別最適な学びと協働的な学びの往還 (主体的・対話的で深い学び)	本物の学び	13 授業では自分の生活に結びつけて考えようとしている	30%	46%	20%	5%	75%
		14 授業で学んだことを、生活の中でいかそうとしている	36%	43%	17%	4%	79%
	探求的な学び (問いから始める学び)	15 学校の授業では新たな発見や気づきがある	44%	43%	11%	3%	87%
		16 授業では「なぜ」「どうして」「どうやって」という気持ちをもって学んでいる	42%	40%	14%	4%	82%
		17 授業では、試したり考えたり(試行錯誤)を繰り返しながら、課題の解決に取り組んでいる	40%	42%	15%	3%	82%
		18 つくばスタイル科では、自分が感じた疑問などを解決する学びの機会がある	39%	42%	15%	4%	81%
	個別の学び	19 授業では、学習の方法やペースを自分で選びながら学んでいる	46%	39%	12%	3%	85%
	協働の学び	20 授業では、自分が必要な時に、仲間と協力しながら学んでいる	59%	32%	7%	2%	91%
		21 授業では、いろいろな人と学ぶことで、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができる	48%	39%	11%	3%	86%

③幸せな学校づくりアンケート 「管理から自己決定へ」

相対的に低いものが赤く、
高いものは青で表記↓

肯定的 ← 1 2 3 4 → 否定的

カテゴリー		質問項目	1	2	3	4	1+2
子どもが自己決定できる 学校環境	安心できる 学校環境	22 学校には、自分の気持ちを分かろうとしてくれる仲間がいる	65%	28%	5%	3%	92%
		23 学校には、自分の気持ちを分かろうとしてくれる先生や大人がいる	54%	34%	8%	4%	88%
		24 学校には、安心できる居場所がある	54%	31%	9%	6%	85%
	民主的な 学校環境	25 自分の考えや意見を伝えやすい学級・学年だと思う	45%	39%	12%	5%	84%
		26 あなたの考えや意見が大事にされていると感じる	37%	42%	15%	6%	79%
		27 学級や学校をよりよくするために、一人一人の意見や考えを大切にしながら、みんなで話し合っている	46%	40%	11%	4%	86%
		28 みんなのがんばりや挑戦を応援している学級・学年だと思う	55%	34%	7%	3%	89%

④幸せな学校づくりアンケート 「認知能力偏重から非認知能力の再認識へ」

相対的に低いものが赤く、
高いものは青で表記↓

肯定的 ← 否定的 →

カテゴリー	質問項目		1	2	3	4	1+2
幸せに向かうために育んでほしい 非認知能力	自己調整力	29 日々がんばれるような、自分なりの目標を持っている	50%	34%	11%	5%	84%
		30 目標に向かって、自分を振り返りながら進めている	43%	37%	15%	5%	80%
		31 分からないことや、できないことがあったとき、なんとかしようと思う	55%	35%	7%	3%	90%
		32 どんな学び方や進め方が自分には合うのかが分かっている	42%	36%	16%	7%	78%
	自己受容感	33 自分には「よい」と思えるところがある	52%	32%	10%	6%	84%
		34 自分を大切に思っている	52%	32%	10%	5%	84%
	他者への受容感	35 自分とは違う考えや気持ちをもっている人の話でも、最初から否定しないで聞くことができる	56%	36%	6%	2%	92%
	自己効力感	36 たいていのことには、「自分はきっとできる」と思って取り組んでいる	43%	39%	14%	5%	81%
		37 自分は、失敗したとしても、その経験を次に生かそうという思いがある	47%	37%	12%	4%	84%
		38 挑戦しようとする気持ちをもって、様々なことに取り組んでいる	48%	36%	12%	4%	84%
		39 学校で困ったことがあったとき、誰かに助けを求めることができる	50%	34%	11%	6%	84%
	自己実現	40 将来の夢や希望をもっている(あんな人になりたい、こんなことがしたい、こんな仕事につきたい など)	58%	24%	10%	8%	82%
	社会貢献意識	41 地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う	42%	39%	13%	6%	81%

2 市全体の取組として

相対的に数値が低い項目→今年度の重点に (伸びしろあり)

- ア どんな学び方や進め方が自分に合うかが分かっている
- イ 授業では、試したり考えたり(試行錯誤)を繰り返しながら課題の解決に取り組んでいる
- ウ 学校での授業を通して学ぶ楽しさを感じている
- エ つくばスタイル科では、自分が感じた疑問などを解決する学びの機会がある
- オ 授業では自分の生活に結びつけて考えようとしている
授業で学んだことを生活の中で生かそうとしている
- カ あなたの考えや意見が大事にされていると感じる

ア 「どんな学び方や進め方が自分に合うかが分かっている」

課題が反映された児童生徒の様子【見取り】

- 自ら進んで学習方法を工夫しようとし
(例)実験の様子を動画に収めるなどの工夫が見られない
- (例)ノートを工夫してまとめている子が少ない

その様子を生み出している要因

- 児童生徒が学習内容や学習方法を選択する場面が少ない(学習の自由度が少ない)
- 学び方や進め方をふりかえる時間の設定や指導が不十分である

その要因に対する学び推進課の手立て

- 訪問時の授業づくり伴走、各教科での研修講座にて、以下の取組の重要性の再認識を促す
 - ・指導の個別化（多様な教材・教具の準備、その子にあった進め方）
 - ・見通し→実行→振り返りを通して、学び方・進め方のよさを学べるような自由度のある学習内容と授業展開
(自由進度学習による自己調整能力の育成)

イ 「授業では、試したり考えたり(試行錯誤)を繰り返しながら課題の解決に取り組んでいる」

課題が反映された児童生徒の様子【見取り】

- 間違えた答えを消したがる
- 時間をかけずに最短で答えを得たがる
- 教師に言われたことしかしない

その様子を生み出している要因

- < 児童生徒 >
 - 児童生徒に正解でないといけないという思いがある
 - 教科書の内容を既に塾などで学んでいるため、課題解決に取り組む意欲に乏しい
 - 指示通りの方が楽でよいと考える児童生徒もいる
- < 教師 >
 - 時間内に学習内容を教えきることを優先している
 - 教師が先回りをして教えてすぎている（指示が多い、失敗させない）
 - 穴埋め式のワークシートでの学習など、試行錯誤しにくい授業設計

その要因に対する学び推進課の手立て

- 訪問時の授業づくり伴走、各教科での研修講座にて、以下の取組の重要性の再認識を促す
 - ・挑戦による失敗が賞賛される学級づくり
 - ・こどもの問いから始まる授業づくり
 - ・アウトプット重視の授業展開（理解の深化）
 - ・授業の振り返りやフィードバックを通した教師の指導観の転換

ウ 「学校での授業を通して学ぶ楽しさを感じている」

課題が反映された児童生徒の様子【見取り】

- 「もう時間なの？」というような夢中で学習に取り組む姿があまり見られない
- 「分かった、できた」という喜びや学習が「役に立った」という実感をもてていない子が一定数みられる

その様子を生み出している要因

- 学習課題を先生が与えている
- 学習課題が学びたいものになっていない
- 児童生徒が対話するなどの活動場面が少ない
- 児童生徒が見通しをもって学習し、自分自身で解決できたという実感がもてていない

その要因に対する学び推進課の手立て

- 教師が「問いから始める授業」のよさを学べるようにする
(校内研修で活用できるものを準備)
 - ・研修用動画の作成
 - ・研修マニュアルの作成
- 訪問時の授業づくり伴走、各教科での研修講座にて、以下の取組の重要性を再認識させる
 - ・活動場面の確保とその目的・ゴールの明確化
 - ・振り返りを通して自分の成長を実感させる

エ 「つくばスタイル科では、自分が感じた疑問などを解決する学びの機会がある」

課題が反映された児童生徒の様子【見取り】

- 自分で課題解決しようという意欲が感じ取れない
- 調べ学習が学習の中心になっている

その様子を生み出している要因

- 課題や学習内容を先生が決め与えている
- 教師が学習プラン通りに授業を進めていて、子どもに当事者意識を十分にもたせられていない
- 外部講師やフィールドワークに係る日程調整、事前調査等に時間がかかるため、調べ学習など校内で学べるものに偏りがちである
- 一人一人の探究に向き合うのが人的に困難である

その要因に対する学び推進課の手立て

- 「児童生徒の好きや得意を伸ばす探究学習」を進めるための時間を拡充
- つくばスタイル科改善のための研修会の実施（探究学習の意義、学習を進める上での改善ポイント）
- 保護者・地域との協働による探究学習の好事例の横展開（CS担当者が外部講師との連絡調整、探究学習ボランティアの募集など）

オ「授業では自分の生活に結びつけて考えようとしている」 「授業で学んだことを生活の中で生かそうとしている」

課題が反映された児童生徒の様子【見取り】

- 日常生活を想起して、学習内容と結びつける力が乏しい
(例)「家の植物は日の当たる場所で元気になるから、植物の成長には日光が必要だ」と考えられない
- 学んだことを生かす姿が乏しい
(例) 数の数え方の工夫、学んだ語彙の活用
- 教科の学びが役立つと感じていない

その様子を生み出している要因

- 子どもたちの生活体験(経験)そのものの不足している
- 教師が生活場面での疑問や必要感を学習課題に結びつけていない
- 児童生徒がどのような場面で、知識・技能を活用できるかが分からずにいる
- 日常の文脈の中で学ばせていない(暗記、繰り返し)
- 学びを活用したことに対する価値付けが乏しい

その要因に対する学び推進課の手立て

- 訪問時の授業づくり伴走、各教科での研修講座にて、以下の取組の重要性の再認識を促す
 - ・体験を重視した学習活動の推進
(栽培・ものづくり活動、長さや重さなどの量感を育む活動、五感を用いた活動など)
 - ・生活上の疑問や必要感から課題をつくる
 - ・学習内容と生活との関連を考える機会をつくる
- ・パフォーマンス課題(知識・技能を活用する場面)を設定する
- ・探究学習の中で、児童生徒が各教科の知識・技能を活用した場면을価値付ける

力「あなたの考えや意見が大事にされていると 感じる」

課題が反映された児童生徒の様子【見取り】

- 自分の意見を述べようとしない子もいる
- 発言した子への周りの反応が乏しい
- 一部の児童生徒の意見だけで学級が回っている
- 差違が認められない子もいる（不平等）

その様子を生み出している要因

- 聞き合う基盤としての学級の規律が確保されていない
- 個々の個性・特性が受容されていない
- 「大事にされている」とする感じ方が、児童生徒個々によって異なる（受容、承認、称賛、採用）

その要因に対する学び推進課の手立て

○グループワーク学習(人間関係づくり)の全校展開

○ルールメイキングの推進

- ・多様な他者と協働する上で必要な約束事について対話する活動
- ・コーチングで児童生徒の思い・考えを引き出す関わり

○各校でのi-checkの有効活用 →分析からの対策

訪問時の授業づくり伴走・各教科の研修講座

- ・指導の個別化(多様な教材・教具の準備、その子にあった進め方)
- ・見通し→実行→振り返りを通して、学び方・進め方のよさを学べるような自由度のある学習内容と授業展開(自由進度学習による自己調整能力の育成)
- ・挑戦による失敗が賞賛される学級づくり
- ・こどもの問いから始まる授業づくり
- ・アウトプット重視の授業展開(理解の深化)
- ・授業の振り返りやフィードバックを通した教師の指導観の転換
- ・活動場面の確保とその目的・ゴールの明確化
- ・振り返りを通して自分の成長を実感させる
- ・体験を重視した学習活動の推進
(栽培・ものづくり活動、長さや重さなどの量感を育む活動、五感を用いた活動など)
- ・生活上の疑問や必要感から課題をつくる
- ・学習内容と生活との関連を考える機会をつくる
- ・パフォーマンス課題(知識・技能を活用する場面)を設定する
- ・探究学習の中で、児童生徒が各教科の知識・技能を活用した場면을価値付ける

ルールメイキングの推進

- ・ 多様な他者と協働する上で必要な約束事について対話する活動
- ・ コーチングで児童生徒の思い・考えを引き出す関わり



モデル校における授業公開



市内学校職員の情報交換会

グループワーク学習(人間関係づくり)

- ・ グループワークの全校展開 各学園事前研修→実践→フィードバック



- ・ 各校でのi-checkの有効活用→分析からの対策

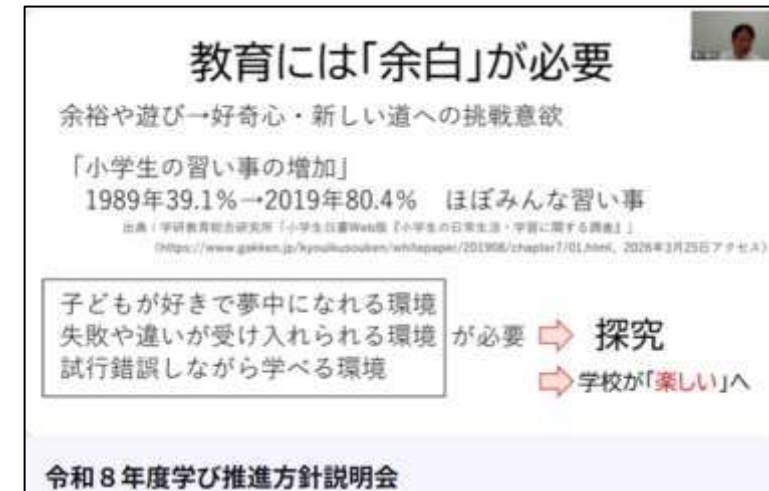
「問いから始める授業」づくり

- ・ 校内研修で「問いから始める授業づくり」を学ぶ
よい問いとはどのような問いなのかを考える機会へ
- ・ 研修用動画の作成
- ・ 研修マニュアルの作成



つくばスタイル科のブラッシュアップ

- ・つくばスタイル科改善のための研修会の実施
(探究学習の意義、学習を進める上での改善ポイント)

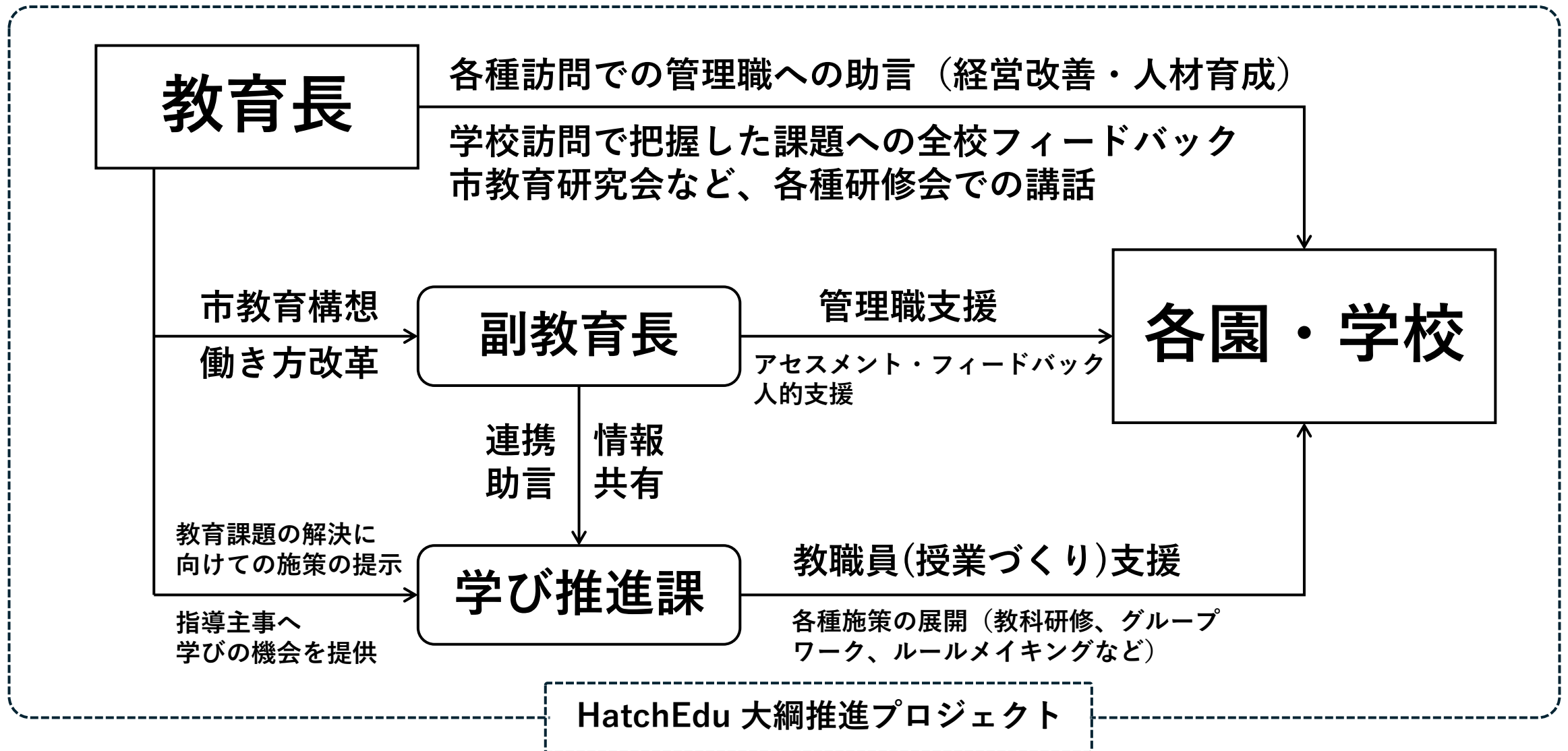


オンライン研修の様子

- ・「児童生徒の好きや得意を伸ばす探究学習」を進める時間の拡充
- ・保護者・地域との協働による探究学習の好事例の横展開
(CS担当者が外部講師との調整、探究学習ボランティアの募集など)
- ・探究学習のヒントとなる指導法の提供 (ガイドの作成)

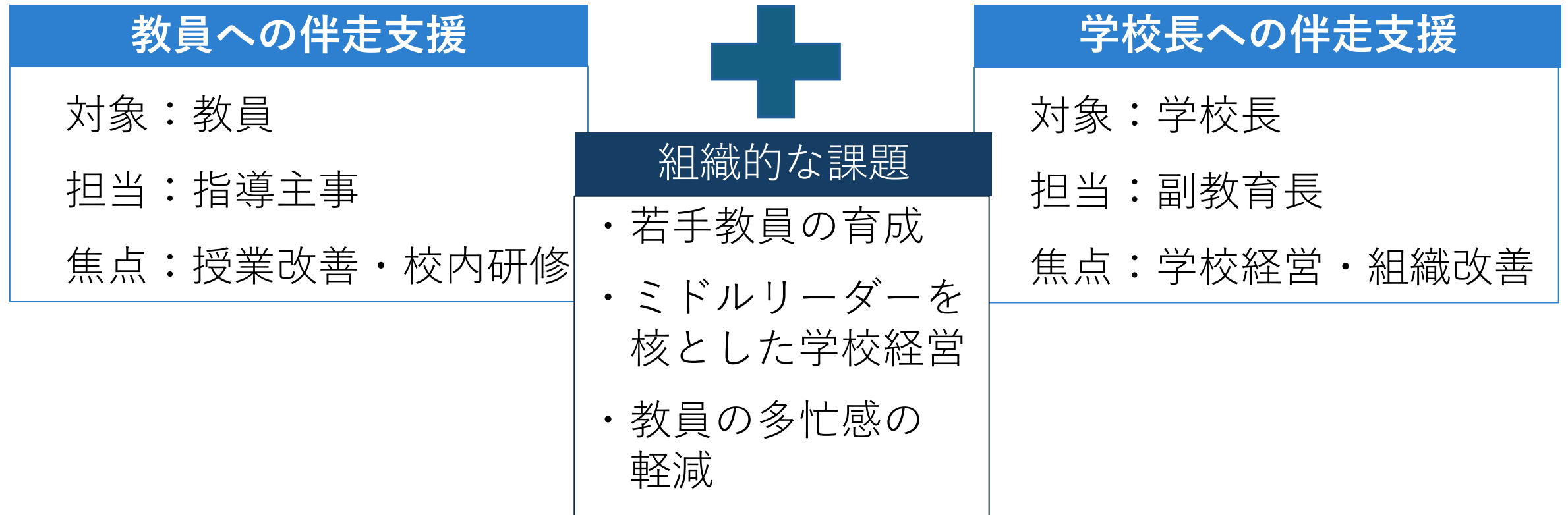
学び推進課による浸透に向けた取組

改善の取組プラス



副教育長訪問

1 実施の背景



指導主事による「授業」への伴走支援に加え、副教育長による「経営」への伴走支援が加わることで、教育大綱の具現化をさらに加速

副教育長訪問

2 取組の具体

教職員が**いきいき**と
子どもに関わる環境
学校組織の活性化



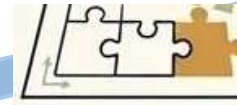
1 step 傾聴

学校長のビジョン
聞き取り



2 step 分析と助言

市アンケート等
データに基づく
実態把握と助言



3 step 共創

具体的なアクション
プラン立案の伴走

教師同士の対話の場の設定(TTB)

- ・ 教師同士が自由に対話し合える交流の場を設定

- ・ 普段の教育活動を振り返る場
- ・ これからの教育への思いを高める場
- ・ 校種を超えた人的ネットワークの構築

など

つくばの先生たちの、新しい放課後クリエイティブ会議!

TSUKUBA TEACHERS' BASE (Kick-off Party)

堅苦しいのはナシ! もっと自由に学んでいい!

「もっと面白い学校にしたい!」その思い、みんなでシェアしませんか?
ここは、正解のない探究の場。経験年数も校種も関係なし!
コーヒーとワクワクを持ち寄って、未来の学校を語り合おう!

Aコース:ホームルーム

・ キーワード: #安心 #仲間 #リフレッシュ
#対話 #共有 #土台作り #モヤモヤ

Bコース:授業Labo

・ キーワード: #創造 #リーダーシップ
#挑戦 #探究 #協働 #協働 #授業デザイン

【今回のテーマ】
子どもたちが「最高!」
って言う学校って?
(あなたの「楽しい!」を教えて!)

【開催概要】
時期: 令和8年2月27日(金) 16時~17時30分
場所: つくば市役所 (コミュニティ棟1階会議室1・2)
対象: 全教職員 (希望制) 先着50名 企画協力: みんなで作戦会議中!
問合せ先: 学び推進課 ☎029-883-1111(代表) 申込締切【令和8年2月23日(月)】

申込はこちら!

3 学校個別の取組

各校のアンケート結果・各種調査等を生かした学校改善

各校のアンケート結果・
各種調査結果の分析

副教育長訪問

行動計画作成(管理職)

学校改善シート

授業改善

学び推進訪問の活用
校内研修
(問いから始める授業
づくり)
相互授業参観
公開授業参観
学園研修

学級経営の充実

グループワーク
ルールメイキング
哲学対話
コーチング
i-checkの活用

学校組織の活性化

教育長からの助言
副教育長訪問



教育大綱のさらなる浸透に向けて

◎浸透に向けた本課の取組やその方向性について

会 議 録

会議の名称	令和 8 年度(2026 年度)第 2 回つくば市総合教育会議		
開催日時	令和 8 年(2026 年) 8 月 21 日 (金) 午前 9 時 00 分から午前 11 時 00 分まで		
開催場所	つくば市役所 5 階 庁議室		
事務局(担当課)	教育局教育総務課		
出席者	委員	五十嵐市長、森田教育長、倉田教育委員、和泉教育委員、 坂口教育委員、手打教育委員	
	事務局	《教育局》久保田局長、根本副教育長、柳町次長兼中央図書館 長、勝村次長兼教育施設課長、森田次長兼学務課長、久松学 校教育審議監、青木企画監 《教育総務課》山岡課長、小野村課長補佐、椎名係長、鈴木係 長、高橋主任 《総合教育研究所》相澤所長、増沢学校教育政策監、宮本(聡) 指導主事、宮本(豪)指導主事	
公開・非公開の別	■公開 □非公開 □一部公開	傍聴者数	2 名
議題	教育大綱を浸透させるためには		
会議次第	1 開会 2 議題 ICT 教育について 3 閉会		
<審議内容> 事務局(教育総務課)：ただいまから令和 8 年度第 2 回、つくば市総合教育会議 を開催いたします。本日の司会を務めます、教育総務課の山岡と申します。ど			

うぞよろしく願いいたします。今回は、「ICT 教育について」という議題で意見交換を行いたいと思います。本日の会議終了時刻は 11 時を予定しております。議事録の作成にあたっては、AI 音声認識を使用いたしますので、ご発言の際には、マイクのご使用をお願いいたします。それでは、ここからの進行は市長をお願いいたします。

市長：よろしく願いします。先日、研究学園の小中学校を視察させていただきました。現場で行われている取組や課題についても伺いました。今日はまず全体の取組について共有していただき、その後、いつものように皆さんとディスカッションを行いたいと思います。よろしく願いします。では、早速先生からプレゼンしていただいてよろしいでしょうか。

総合教育研究所増沢学校教育政策監：総合教育研究所増沢です。私からは本市の ICT 教育の取組についてご説明いたします。初めに、つくば市の ICT 活用の方針についてお伝えします。スライドとあわせて、お手元の「つくば市版 ICT 活用方針」もご参照ください。資料 2 枚目「つくば市版 ICT 活用方針」は、ICT 活用の基本的な考え方と留意点を示したもので、市内の学校が安全かつ効果的に ICT を活用できるようにすることを目的としています。ここでは基本的な考え方を 4 つお示しします。1 つ目は、ICT は目的が先、活用は後とし、ICT は授業の目標を達成するための手段として位置付けています。2 つ目は、情報モラルを育みながら ICT を活用します。情報発信の影響を学び、自他の権利を尊重する態度を身につけながら利用します。3 つ目は、実態を伴う学びを基盤とした学びの広がり・深まりを目指しています。手書きや対話の実体験を基に、ICT は学びの拡張に役立てていきます。4 つ目は、子供の自己決定を尊重し、児童生徒がアナログとデジタルを目的に応じて選択できる力を育みます。これら 4 つの基本的な考え方に沿って、ICT を活用し、児童生徒の学びを豊かなものにしてまいります。

続きまして、6～7 月に私が学校訪問した際の様子から、ICT 活用の実際につ

いてお伝えします。こちらは5年生の国語の授業です。記事の意図が伝わる見出しを考え、新聞を作成する学習です。初めに先生と同じ画面を手元で確認しながら、よりよい見出しの書き方を学びます。その後は、レイアウトを考えながら、手書きで新聞を作成する児童もいれば、デジタル写真を使い、背景色を工夫しながらタブレットで新聞を作成する児童もいます。それぞれの記事の意図が読み手にしっかり伝わるよう、紙とデジタル、それぞれの良さを生かしながら学習に取り組んでいます。

続いて、3年生のつくばスタイル科の授業です。つくばスタイル科とは、環境、キャリア、歴史文化などをテーマに探究的に学び、問題発見力や創造力などの21世紀型能力の育成を目指す、つくば市独自の教科です。ここでもアナログとデジタルを目的に応じて使い分けながら学習を進めています。町の自慢探しに出かけたフィールドワークの結果は、模造紙にまとめ、その成果からわかったことはパソコンで整理し、みんなに伝えています。その後の話し合いの場面では、紙に書いたメモをもとに話す児童もいれば、パソコンにまとめたメモをもとに話す児童もあり、それぞれ自分に合った方法で学びを進めています。

次に、4年生のつくばスタイル科の授業です。家庭や学校の「もったいない」をテーマに、ごみの量を測ったり、ごみの様子を写真に撮ったり、調べたことと関連付けながら分かったことをまとめています。ここでも、紙とペンで模造紙にまとめる児童やパソコンでデータを整理する児童など、さまざまな方法が使われています。タブレットなどのデジタル機器が探究の道具として有効に活用されていることが、この様子からもわかります。

2年生の国語の授業です。よりよい音読を目指した学習を行っています。初めに、これまでの音読の良いところと課題をクラス全員で共有します。それをもとに、イヤホンをしてしながら自分の音読の様子を何度も確認したり、付箋に書いたアドバイスを交換し合いながらペアで学習を深め合ったりしています。ICT

を活用することで、自分の音読の様子を客観的に評価でき、みんなの意見を短時間で共有できるため、改善のためのアイデアが広がっていきます。

続いて、2年生の算数です。身の回りの入れ物のかさを調べる学習をしています。写真のように、実態をもとに量と単位の間係を学びます。右上のICT機器は、リットルやデシリットルといった単位の違ひや単位の使い分けに関する知識が曖昧な部分にヒントを与えることに役立っています。実体験を通して量の感覚を身につけ、デジタルで学びを定着させるなど、目的に応じた使い分けをしています。

次に、1年生の算数です。足し算・引き算について学んでいます。ここにはりんごのイラストやマグネットがあり、電子黒板には児童が考えた図が表示されています。机の上には実物のブロックと、自分の考えを写真で送信するためのタブレットが置かれています。多様な教材を用いて複数の考え方で学び、理解を深めています。ペアで考えを確認し合ひながら課題解決に取り組む場面もあります。教師は、数や図式など表現が異なっても同じ意味であることを児童に学ばせています。

2年生の国語の授業です。カタカナで書く言葉の特徴を学ぶ学習です。児童は普段読んでいる本から、カタカナで書かれている言葉をたくさん探します。それらのカタカナ語をワークシートに種類ごとにまとめ、見出しをつけていきます。これにより、カタカナで書かれた言葉の特徴に気づいていきます。例えば、外国から来た言葉はカタカナで書かれていることや、音などを表す言葉もカタカナだと分類します。各班の結果を写真に撮り、その結果をもとにみんなで気づきを共有し、カタカナへの理解を深めています。この場面でも、本という身近なものから学び始め、デジタルを活用して考えを共有し、学習を深めていることがわかります。

次に、6年生のつくばスタイル科です。将来就きたい職業とそのやりがいについて伝えています。タブレット端末を相手に見せながらプレゼンテーション

を行い、聞き手はメモを取りながら質問し、職業への理解を深めています。授業後にパソコンを使って伝える良さについて児童に尋ねたところ、写真や動画を使ってわかりやすく伝えられること、詳しく知りたい人にはリンクをたどって詳細を説明できることなどを挙げていました。デジタルの良さを生かしたプレゼンテーションとなっています。

続いて、6年生の学級活動です。「修学旅行での学びや成長を普段の生活に生かすには」という議題で話し合いを行っています。ここでは「スクール AI」という生成 AI を活用しています。スクール AI は、児童一人一人に最適な学びをサポートする教育特化型の AI で、不適切な利用を防止する仕組みが備わっています。まず、AI とともに修学旅行の振り返りをします。修学旅行での出来事を入力すると、AI は「その出来事があったのはいつか」「何が原因か」「問題はどうか解決したか」「何を感じたか」など対話的に問いかけ、経験を学びへと昇華させます。振り返り後は、児童の司会のもと、普段の生活にどう生かすかをみんなで話し合い、より良い学級づくりに役立てています。

8年生の英語の授業です。ここでもスクール AI を活用しています。数学や英語は学習の進度に差が出やすい教科であり、個別に支援するためには ICT のサポートが欠かせません。スクール AI は、生徒が記入した英文に対し、個別にアドバイスを提供します。AI に適切な役割を付与することで、回答を直接示したり添削したりするのではなく、「どのように表現するとよいか」といったヒントを与える役割を担います。もちろん、生成 AI が教育の全てを担えるわけではありません。先生はさらなる理解を促し、努力を価値づけることで、生徒の主体的に学ぶ態度を養います。また、友達同士で問題解決をしたり、実際にコミュニケーションをしたりする中で、生きて働く知識や技能へと変えていきます。

ここまで、6～7月の学校訪問の様子を紹介してきましたが、学校ではアナログとデジタルを目的に応じて使い分け、バランスよく活用しています。次期学

習指導要領では「デジタルの力でリアルな学びを支えること」を基本的な考え方として示しており、つくば市の取組はまさにその方向性に沿っています。ここからは、これまでの説明以外の ICT 活用の取組について紹介いたします。

総合教育研究所宮本（豪）指導主事：総合教育研究所の宮本と申します。私からは、これまでつくば市で実践されてきた様々な場面における ICT 活用の実際についてご紹介いたします。まず、1 人 1 台端末の環境において、一人一人に応じた個別最適な学びが欠かせないものとなっています。自分の状況に合った学び方、自分に取り組んでみたい学習方法によって、多様な子供にとって学びやすい環境が整ってきています。例えば、教科書の内容を読み取ることに困難を感じている子供は、動画を何度も繰り返し視聴し、一時停止や戻る操作をしながら自分のペースで理解を深めることができます。調べ学習の際にはテレビ会議システムを使い、外部の専門家にインタビューすることも ICT だからこそ可能な学び方です。こうした学び方は、ICT だけでなく紙ベースの教科書や資料集、参考図書、教師の説明、友達との関わりなどとハイブリッドに組み合わせることで、より学びやすい環境を構築しています。また、このような個に応じた学び方は基礎学力の向上にも寄与しています。個別最適な学びを支援する学習支援システム「インタラクティブスタディー」では、自分の学習状況に応じた問題の選択や、間違えた問題の分析に基づく補充問題に取り組むことができます。これにより個々に応じたステップアップが図られます。画面のように、一人一人の達成状況を教師が一目で確認でき、いつでも何度でも取り組めるうえ、自宅でも学びを促進できます。

また、ICT の授業活用において特に効果的なのが、力を合わせて課題に取り組む協働的な学びの場面です。右上の写真をご覧ください。1 つのワークシートファイルをグループで同時に書き込める共同編集機能により、グループ内の友達や他のグループの意見を参照しながら学びを進めることができます。また、まとめた内容を発信する際には、端末の操作で拡大したり、丸をつけた

り、書き込んだりすることで、表現の幅を広げることが可能です。調べたことを確かめ合いながら実験を行ったり、左下図にあるように電子黒板に相談や書き込み、検索をしながらメモを書くこともできます。こうした ICT 活用は、実物教材との併用が効果的です。例えば、地図で調べた都市をインターネットで調べたり、逆にインターネットで調べたことを地図で確認したりする活動も行われています。学んだことは、学校内だけでなく電子掲示板機能を通じて、上の学年や他の学校に発信し、意見交流をすることもできます。市内の 51 校が交流できるこの掲示板は、学びの視点をさらに広げる役割を担っています。個別最適な学びを孤立させることなく、友人と協働することで、より深く価値ある学びにつなげています。そして何より、日常的に ICT を活用することで、子供たちの ICT スキルも向上し、よりよい学習活動へと発展しています。急速に広がっている生成 AI についても、その特性やリスクを学び、学びの質を高めるために活用しています。

先ほど紹介があった教育特化型 AI「スクール AI」は、入力した内容を学習せず、履歴を教員が閲覧可能です。不適切な表現が入力されると即座に通知が届くなど、非常にセキュリティが高いシステムです。また、すぐに回答を示さず、相手の考えを掘り下げる質問を返したり、調べ方を紹介したりするなど、教員が AI に指示を設定できるため、教育現場で活用しやすい特徴があります。AI の回答を参考に、対話を通じて内容をさらに深めることもでき、英語のリスニングやライティングの練習にも効果的です。さらに、AI との向き合い方も学び、子供たちが自ら安全・安心に AI を活用するルールを作り上げる活動も様々な学校で行われています。こうした子供たちからは「AI との上手な付き合い方がわかってきた」「考える力を伸ばすためにうまく使いたい」といった声も上がっています。

ルールづくりの活動にも ICT が支えとなっています。学校での学習者用端末の使い方については、各学年の意見をフォームで集約したり、テレビ会議シス

テムを使って集会を開いたりし、多人数での意見交流も気軽に行えます。また、保護者や有識者からの意見もフォームを通して回収し、生かす学校もあります。こうした子供たちの健康を守るルールづくりは学校内だけでなく家庭にも推奨されています。情報モラル教育は、つくばスタイル科を中心に、各教科でも重視されています。右側の 2 つの写真は、フェイクニュースの仕組みを学ぶ授業の様子です。子供たちは情報を鵜呑みにせず、多角的に確かめることや、一度立ち止まって考えることの大切さを学んでいます。

子供たちの学びとともに、校内研修を通して教職員の情報モラルやセキュリティ研修も実施されています。コロナ禍の対応が生かされ、遠隔オンラインによる外部との交流も活発になりました。市内はもちろん、市外や県外の学校と学ぶことで、地域性の違いを知ったり視点を広げたりするきっかけになっています。写真は東京の学校と社会の合同授業で、互いのデジタル課題を解消するために話し合った様子です。また、外部人材の活用もしやすくなりました。来校してもらうには距離やスケジュール調整の障壁がありましたが、オンライン実施によりハードルが大幅に下がりました。ゲストの仕事の隙間時間を活用できるなどの利点も生まれています。外部人材とつながるハードルが下がったことで、企業視点から学ぶアントレプレナーシップ教育や、研究者が子供の探求支援を行う「つくば STEAM コンパス授業」なども、ポータルコミュニケーションシステムを通じて直接やり取りできます。オンライン中継や来校へもスムーズにつながり、専門家の伴走支援が行いやすくなりました。こうした状況を踏まえ、年々 STEAM 授業などに参加したい学校も増えています。

社会で活躍する資質・能力として、プログラミング的思考の育成も重視されています。ブロックを組み合わせてプログラムを作るビジュアルベースのプログラミングは、小学生を中心に行われています。音や光、温度などを制御するプログラミングツールや小型ロボットを使い、外部出力をして生活に生かす体験を行う学校もあります。こうしたプログラミング教育は各学校の年間計

画に組み込まれています。中学生では、テキストベースのプログラミングを技術化で学べるアプリケーションを導入しており、パン屋の宣伝用スマート電子掲示板や地域の魅力を伝えるウェブサイト作成などのチャプターを受講しながら学んでいます。このように ICT は学びを広げ深めるだけでなく、子供たちの困り感を軽減・解消するツールとしても活用されています。例えば右上の写真は、外国籍の子供の日本語支援のために、翻訳機能を備えたディスプレイを設置している様子です。また、枠内に収めて字を書くことが難しい子供は画面を拡大して書くことができます。読みづらい文字や細かなイラストも大きく表示され、読みやすくなります。文字の集合をうまく処理できずに困る子供には、読み上げ機能が大変役立っています。タイピングが難しい場合でも音声入力やタッチペンでの書き込みが可能です。学習者用デジタル教科書は、これらの機能を 1 画面で設定でき、ルビ機能で文章を読むこともできます。グラフなどの資料を保存し、自分のまとめに活用することも可能です。こうした子供を支える ICT 活用の一例としてデータ利活用も挙げられます。子供たちの端末のデスクトップには学習ポータルサイトがあり、学校の先生なら誰でも相談できる「先生あのね」が存在しています。担任に相談しづらいことも、別の先生に気軽に相談できます。学級目標や生活状況はアンケートフォームで定期的に集約され、数値化・グラフ化されます。これにより、子供たち自身が「どのように幸せに暮らせる学校を作るか」を考え、行動するきっかけとなっています。このように、ICT によってきめ細やかな学び、つながり、健康への配慮、情報モラル、困り感への支援が実現されています。そして何より、子供自身が自ら選択し調整しながら、より良い学校生活を作り上げるためのツールとして ICT は役立っています。以上で説明を終わります。

市長：ありがとうございました。では、まず先生のプレゼンテーションに対して質問等をいただき、その後にディスカッションに移りたいと思います。質問はどなたからでも結構です。この間の視察に絡めて質問していただいても構い

ません。ディスカッションは会議の後半でも良いかと考えております。それでは、何か確認したいことはありますか。今の説明について、ご質問がありましたらどうぞ。

手打委員：どうもありがとうございました。今お話を拝見し、デジタル化の有効性について理解いたしました。私自身はデジタルの後発世代ですので、AI の活用はほとんど行っておりません。その立場から申し上げたいのですが、画面にもありましたように、個別の授業が子供たちのペースに合わせて進められること、また、子供たちが自分の困っていることを AI に相談するなど、そうした形で授業が展開されることは、それぞれの子供たちの個別性を重視していることにつながると理解しました。一方で、学校教育においては、一定の時間である単元を子供たちに習得させることが教師としてのねらいであると思います。つまり、個別に自分がわからないことを AI に相談したり、デジタル情報を活用する方法と、クラス全体でその時間内に達成すべき課題の達成という 2 つの側面があります。このギャップについて両者のバランスを、どのように考え、進めているのかについてお伺いしたいです。

総合教育研究所増沢学校教育政策監：はい、ありがとうございます。確かに、個別に取り組む部分と、みんなで学びを深める部分、そして最終的には目標を達成するという点が、授業において非常に重要になると思います。おっしゃる通りだと思います。学校では、個別に学ぶ時間のほかに、ペアやグループで考えを深める時間、一斉で考えを練り上げる時間などを設定し、目標が達成できるような時間やグループの設定を行っているのが現状です。

手打委員：おそらく正解はないと思います。ただ、これまでも 30 人いれば 30 人の中で、子供たちの教科内容への理解度はそれぞれ異なっており、それは当然のことだと思います。それをデジタルの活用により個別性を重視し、わからない子供が自分のペースで学んでいけることを大切にしようということだと理解しています。ただ、その一方で、一斉授業の中で達成しなければならない課

題との調整が必要になると思います。先生方としては、この時間内に達成しなければならないことがあるため進めざるを得ません。すると、例えば、10 分でできることを 20 分かけてやらなければ理解できない子供がいた場合、どう対応するのか、それは仕方ないとするのか、あるいはどのように工夫するのかという点が問題だと思います。私の理解では、それは従来型の授業と大きく変わらないように思えます。

総合教育研究所増沢学校教育政策監：これまでも個人差に関する課題は私たちにとっても悩みの種でした。いかに補充的な学習や発展的な学習を進めていくかが課題となっておりました。今回の GIGA 端末導入により、その課題を ICT の利点を活用しながら解決していくことが可能になります。ICT を活用することで、補充的な問題から発展的な問題まで幅広く提示できますし、学習の様子も教員が一括で把握できます。これにより、困り感や学習状況に応じた支援ができるようになったことが、むしろプラスの面であると考えています。つくば市では、GIGA 端末導入以前からこうした取組を先行して進めており、知見も十分に蓄積されていると思います。

手打委員：別段、解決策はないことは承知の上で質問しました。

森田教育長：すみません、よろしいでしょうか。先日、子供たちや先生方にもお話ししたのですが、「これまでの一斉授業は必ず全員を目標に到達させるものであったのか」という視点で考えると、一斉授業には、わからない子供やもっと学びたい子供が置き去りにされている状況があることをまず認識すべきです。そのうえで、その解決のために ICT をどう活用できるかを考える必要があります。具体的には、個人の目標を明確にし、授業の終わりに評価を行うこと、また到達すべき目標を子供たちと共有し、「そこまでは頑張ろう」という姿勢を持つことが重要です。そのうえで、学習方法や学習速度を個別に設定することも ICT なら可能ですし、協働学習も ICT を利用すれば先生のリードがなくても進められると思います。このように ICT を活用すれば、一斉授業

の限界を超えることができるのではないか、というのが考え方です。

手打委員：教育長がおっしゃったように、一斉授業の弊害を克服することが重要だと思います。先ほどの話の続きとして、評価の問題もあります。つまり、個々の子供たちがその時間内にどの程度達成できたかということで、デジタル化により個別性が明確になるならば、これまでの評価方法は変わるべきだと考えます。場合によっては、極端に言えば全員がオール 5 という評価になることもあり得るのではないかと思います。その子供なりの達成度を教員が把握し、評価すべきと考えています。

森田教育長：まさにその通りだと思います。

総合教育研究所増沢学校教育政策監：先ほどのお話に私も同感です。学校では学習目標に基づいた評価も大切にしていますが、一人一人がその時間で何ができるようになったかを見取る個人内評価も重視しています。特に探究的な学習が増えている中で、一人一人の学習のプロセスを追い、その成長や価値を認めるフィードバックや、いわばコーチングのような関わりを先生方が大切にしています。手打委員のお話を踏まえ、こうした点をより重視しながら教育活動を進めていきたいと思います。ありがとうございます。

森田教育長：ループリックなどを活用して、「最低はここまでで、発展はここまで」というように各項目で評価基準を示し、子供がどこまで達成しているかを自覚しながら学習を進められる授業も実施しています。ICT を使うことで、授業の学習過程が先生にとって非常に把握しやすくなります。その子がどのような学びをしたかがよくわかるため、デジタルデータを活用することの利点はここにあります。個別の学習状況の把握において ICT が有効であることは間違いありません。

市長：質問がなければ、この間実施した視察の感想も含めて、皆様に共有していただきたいと思います。その後、先生方にもディスカッションにご参加いただき、「これはどうか」「あれはどうか」といった話をしながら進めたいと考え

ています。視察は約 1 か月前のことですが、委員の皆さんもメモを取られておりましたので、どなたからでもご自由にどうぞ。

坂口委員：ご説明ありがとうございました。先日の視察での印象や感想として、幅広く低学年から中学生まで見学し、終了後の懇談会でも意見交換がありましたが、改めて感じたのは、ICT に合う授業とそうでない授業があるということを見極めないと、ICT が目的化してしまう危険性を感じました。しかし、実際にやってみなければわからないことも多く、子供の反応から発見があることもあります。特に高学年になるほど、うまく ICT が活用され、メリットを感じる部分も多いと私自身も実感しています。一方で、低学年では、必ずしもデジタルでなくてもできるのではないかと感じることもあり、デジタル化の目的を明確にし、そのメリットだけでなくデメリットも踏まえた検討が必要だと思います。ICT 教育のメリットについては、多くの良い面をお聞きする一方で、健康面などの懸念もあり、昨年度の教育振興計画第四期のパブリックコメントでも保護者の不安の声が多く寄せられました。そのため、こうした懸念に対しても、「ここはこういう理由でこうです」と説明できなければ、納得は難しいと感じています。私の考えとしては、メリット・デメリット全ての視点をテーブルに出し、発達段階に応じて年齢に合った活用方法を議論することが必要だと思います。GIGA 構想が始まってから 6 年が経過し、多くの実績やデータもあると思いますので、それらを踏まえ、良くない部分については「やめる」「制限する」「年齢に応じた対応を行う」などの議論を進めるべきだと感じています。

市長：ありがとうございます。ご意見を踏まえまして、現在のプレゼンテーションでは課題感やデメリットの話があまり出てこなかったように感じますが、先生方としては坂口さんのお話のようなデメリットをどのように考え、現場で感じているのか教えていただけますでしょうか。

総合教育研究所宮本（豪）指導主事：ありがとうございます。先ほどのご意見の

とおり、ICT が目的化している場面が完全にはいえません。授業の目標を達成する最善の方法の一つとして ICT を活用し、より良くなる場面で使うことが適切だと思っていますし、我々教員もその力を高めていく必要があると考えています。特に今年度、つくば市では ICT 活用方針を全校に配布し、ICT の基本的な考え方と使い方を明確に示しました。その中の「ICT 活用の留意点」には、発達段階に応じた ICT 活用の調整が必要であることも謳われています。特に低学年では負担を最小限に抑え、読み書きや体を使った活動を重視する方針を市内で統一していきたいと考えています。例えば私の娘もアサガオの観察を行います、これまでは絵日記のような手書きで記録していました。しかし、生活科の学習の目標はアサガオの様子を書き留めるだけではないです。そこでタブレットで写真を撮り、写真を見ながら特徴を書き込む方法は非常に有効だと感じています。委員のご指摘のように、使わないところは使わず、深めるところでは ICT を活用し、こうした方針を具現化していく考えです。

坂口委員：ありがとうございます。私のアサガオの写真についての感想を申し上げます。書くことが苦手な子にとっては良い面があると感じています。しかし、植物の観察で幼児期の子供を見ると、例えばコスモスの花が目の前にあるとします。その花について何の情報もない幼児は、「真ん中がふわふわしている」「つるつるしているところと凸凹しているところがある」など、触った感触や様々な五感の情報を感じ取ります。その後、文字を覚えると、先に名札に「コスモス」と書かれているのを見て読むと、「コスモス」が花の名前として認識され、それ以上の情報が体に入っていくにくいように感じます。すると五感で感じた多様な情報が文字情報によって固定化されてしまうように思います。アサガオの観察でも写真を撮って記録することは良いのですが、観察方法としてそれだけで良いのか疑問であり、絵を描くことで新たな気づきが生まれる場合もあり、この両方にメリットとデメリットがあると改めて実感しま

した。幼児期から小学校低学年の発達段階で、情報の入手方法や順序が変わることにより多様な視点が失われやすい点は注意が必要だと思います。

森田教育長：私もその通りだと思います。ICTを進める中で感じるのですが、写真を撮ることは記録として重要であり、手書きと写真の両方が必要です。

「写真を撮るから手書きは不要」というわけではありません。手で触ったり描いたりして気づくこともありますが、気づかなかったことは描けません。写真を使って記録すると、友達の気づきを共有し振り返る材料にもなるため、両方メリットがあるため、それをうまく活用できるよう先生方も勉強しつつ両者の良さを活かす進め方を目指しています。

市長：デメリットという言葉がよく出てきますが、そのデメリットを具体的に列挙するとしたら、例えばどのようなものが現在の共通認識としてあるのでしょうか。資料を見ると、留意すべきこととして書いてある内容の裏返しで、デメリットとして捉えられているのかなと思うのですが、先生方の間では、メリットとデメリットをどのように認識されているのか教えていただけますでしょうか。共通認識が無い場合はそれぞれの見解かもしれませんが。

久松学校教育審議監：はい、久松です。メリットとデメリットは、単元や授業内容によって異なると思います。ICTを使うことで得られるものがある一方で、ICTが目的化してしまい必要性が乏しい場面もあるのではないかと考えています。教える側の職員も、ICT活用が全てに適しているわけではなく、子供に合わない場合もあるという認識を持って指導し、改善していくことが最も重要だと考えています。

市長：もう少し具体的に伺いたいと思っていて、例えば「視力への影響」など、ある程度の具体性をもってどのようなデメリットがあるのか挙げていただけますか。先生方が何かに注意しなければいけない時に、メリットとデメリットを言語化し、把握していないとそれに対応しづらいのではないかなと思います。

総合教育研究所増沢学校教育政策監：そうですね。やはり ICT 活用方針に記されているような留意点は、非常に重要だと考えています。例として姿勢の問題があります。小さな子供は夢中になると前のめりになりがちで、それが姿勢の悪化につながることもあります。また、教員の立場としては、個人を傷つけるような使い方や情報モラルの問題も課題であり、授業や日常の指導の中でしっかり学んでいく必要があると思います。

総合教育研究所宮本（豪）指導主事：現場で子供たちの学習記録を評価するにあたり、デジタル技術の活用能力の差が学習記録に差を生むという点がデメリットとして考えられます。タイピングが速い子供は限られた時間内でより良くまとめられますが、遅い子は意見をまとめきれないこともあります。デジタルで評価を集める際、本当に子供たちの理解が正しく表現されているか疑問が残ります。このような情報活用能力の差は評価の難しさや授業の運営方法に影響し、工夫が求められると思います。

市長：そのような具体的なデメリットがあるのであれば、ある程度リスト化しておく必要があると感じます。先生方が注意すべき点を理解した上で、メリットがある場面では適切に ICT を活用できるようなガイドラインのようなものがあれば良いと思います。先ほどの森田さんのお話はまさにその通りで、結局は先生としての力量が問われる問題だと思います。森田教育長が「教えから学びへ」という考え方を深く理解し、子供たちの学びの場面で実践できるからこそ ICT を効果的に使えるのであって、そうでない場合は失われてしまうものもあるのではないかと感じます。各場面での ICT 使用時のメリット・デメリットが具体的に示されていなければ、先生方はかなり苦勞するのではないかと思います。

森田教育長：確かに、ICT 活用で「こういうことをやらないまま ICT を使うと子供にとって学びにならないですよ」という指摘はできると思います。例えば「明確な目標を持たずに使うと単なる道具になってしまう」といった点です。

ただ、それを具体的な例示として挙げるのは難しいかもしれません。情報モラルの習得、姿勢や時間の管理、健康面への配慮などは明確に伝えられますが、内容的なデメリットの具体化は難しいと思います。先生方はデメリットがないように使おうとしているので、デメリットを言語化するというのは難しいかもしれません。

市長：デメリットを挙げることを恐れる必要はないと思います。手書きにもデメリットは存在するわけですから。そういった意味でニュートラルに捉えた上での選択ができるといいのかなと思いました。引き続き、皆さまの視察のご感想も交えながら議論を進めていきたいと思います。

倉田委員：ICT 活用の利点は、授業での情報共有が容易になることにあると思います。短時間で多人数と共有しやすく、自分の考えを伝えやすく、表現を確保しやすい点が有効です。今までの授業でもグループワークによる共有を目指しましたが、現在の ICT 環境はさらに効率的です。ノートとパソコンでの記録は両方重要であり、データとして残すことも大切です。自己変容を確認できるようにノートに記録しながらデジタルも活用することで、後で振り返りがしやすく、教師も子供の変容を把握しやすくなります。

また、実物とデジタル双方の活用が必要で、片方だけではデメリットが生じてしまうと思います。観察記録も写真と手描きを両方活用し、お互いの良さを活かすことが重要です。

市長：その両方をうまく活用する方法を模索しているのが現場の状況だと思いますが、どのような場面で先生方が悩まれているのでしょうか。ICT 活用を始めても、苦勞された事例もあると聞いています。先生方はどのようなプロセスを経てこの授業へ取り組み、我々はどのように支援できるのでしょうか。先生同士で相談しながら行っているのですか。

総合教育研究所増沢学校教育政策監：基本的には各担任の先生が授業内容に合わせて ICT 活用を考えています。始めはプレゼンテーションのような使い方

や、活動の様子をスクリーンに映して共有し、意見をまとめるといった方法から始まります。そういった中で他の先生の使い方を参考にしたり、研修で学んだりしながら、実践を通して ICT 活用の技術を深めているのが現状です。また、市では研修のサポートやアイデア集の作成を行い、先生方へ情報提供をしています。そのような取組を通じて、先生方は ICT の使い方を学んでいる状況です。

手打委員：ICT の活用についてはこれまで議論してきたところですが、視察の要望として、私の認識では、いくつかの教室を見て回る時間が 5、6 分程度だったかと思います。つまり、授業の中のほんの一部をみただけという印象です。そのため、この授業をどのように展開していくのかを、もう少し詳しく見てみたいと思う時もありました。今後の視察の際には、各委員が関心を持つ教科や学年について、もう少し時間をかけてじっくりと見ていければと思います。

市長：また視察に行きたいということですね。教育委員の皆様が訪問する際は、特別な準備をすることなく、学校も気軽に受け入れられるよう調整していただければよいのではないのでしょうか。いろいろ見たいというご希望ですから。

手打委員：いろいろ見たいというより、授業の全体的な展開をトータルで見たいということです。

市長：それはおっしゃる通りだと思います。学校はしっかり準備して受け入れてくれるのですが、教育委員の皆様が気軽に様々な授業を見に行くことは非常に重要だと思うので、その点については調整が必要だと思います。

久松学校教育審議監：そのような要望があるのであれば、調整したいと考えています。先日の視察は、低学年から中学校までの発達段階ごとに ICT の使い方を理解していただくことを意図して、そのようなセッティングにいたしました。ただ、今後は特定の授業をじっくりご覧になりたいというご要望があれば、どの学年を重点的に見るかななどを教えていただければ対応可能だと思います。

ます。

市長：ありがとうございます。和泉さん、どうぞ。

和泉委員：私事ですが、デジタルに非常に疎く、むしろ手書きで考えないと自身の思考が成り立たないという性質がありますので、非常に難しいというのが正直な感想です。どうして難しいか考えた時に、授業を実際に受けてみないと理解できないように感じており、スクール AI の活用についても分かっていないというのが率直なところですが。先ほど先生方が指示を出して、スクール AI が児童の学びを促進するようなアプローチはすでに行っていてすごいなと驚く一方で、それこそが先生方の指導の醍醐味であり、その子を考える時間でもあると思います。その点がスクール AI に指示して学習が促進されるかもしれませんが、教える側の思考や工夫が奪われることに対して非常に強い不安を持っております。

また、観察学習についてですが、何度も書き直しじっくり観察する時間が学びの本質であると思っています。絵本作家の熊田千佳慕の作品などを見ても、緻密な観察には相応の時間が必要であり、その時間をデジタルが奪ってしまわないか心配です。確かに撮影した画像は参照目的で使用できますが、それはタブレットの活用が目的化してしまっているのではないかと今までの議論を聞いて感じました。

今回の ICT 教育の活用方針に関連し、保護者向けや全市民向けの ICT 教育の説明資料や情報発信はどのようなになっているでしょうか。

総合教育研究所増沢学校教育政策監：基本的には GIGA スクール構想の開始にあたり、文部科学省の資料を含めて、端末の学習上のルールや使い方の指針を市でも作成し、子供たちや保護者に配布しております。学校では子供たちが正しく学べるよう指導を行っております。

和泉委員：それは 2019 年か 2020 年ごろのことではないでしょうか。

総合教育研究所増沢学校教育政策監：はい、令和元年にスタートし、令和 3 年頃

にはほぼ全ての自治体が端末配布を完了している状況です。

和泉委員：ありがとうございます。なぜこのことをお聞きしたかと言いますと、その後入学してくる児童生徒の保護者に対して、GIGA スクール構想に関する情報配布は継続的に行われているのか疑問に思ったためです。

森田教育長：2025 年にも行っています。

和泉委員：今回いただいた資料は、活用方針に関するものですが、そもそも ICT 教育がなぜ始まったのか、ICT 教育とは何かということを保護者が理解した上で活用方針が策定されていると考えていますが、私が調べた限り、保護者の中には事情をよく理解していない方も多いようです。保護者が能動的に情報を取ろうとしない面もありますが、頻繁に授業参観があるわけでもなく、子供から全ての内容を報告されるわけでもないため、一学年の年度初めに説明がある程度という現状が伺えます。そのため、毎年しっかりと ICT 教育の意義や内容を説明し続けることは説明責任として重要だと考えます。何か問題が発生した際に、「なぜ？」という不信感や不安が高まることも考えられます。非常に新しい技術であり、若い保護者であってもタブレットなどを使った教育は受けていないと思うので、保護者の理解を深め、困りごとを聞き取る体制を整えることが必要だと思います。

市長：確かに保護者とのコミュニケーションの頻度は、僕自身あまり見聞きする機会は多くないかもしれませんね。

倉田委員：正直なところ、私の個人的な感想になりますが、学校と家庭が完全に情報を共有していくというのは、安全面も含めて非常に難しいと感じています。家庭の事情はさまざまで、子供たちをしっかりと管理できる体制がどれほど整っているかも疑問です。実際に私の孫を見ても、タブレットやパソコンを自由に使いこなしている状況で、親が厳しく注意しても、それがないと勝手に使ってしまう。ゲーム利用も当然のように行われており、管理は非常に難しいのが現実です。そのため、生成 AI などに関してもルールやマナーをしっか

り教える必要があります。文部科学省の中教審でも、情報教育の重要性を指摘しており、今後は技術教育を必ず盛り込まなければならないとされています。これを真剣に実行しなければ、逆にコンピューターに使われる時代になってしまうのではないかと危惧しています。管理を含めた使い方に関しては、本当に難しい課題だと感じており、家庭に全てを任せるのは困難だと考えています。

和泉委員：説明をしなければ、せっかくのタブレット活用の効果も、不安や疑問、不信感が生まれて伝わらなくなってしまう可能性があります。質問があれば全て丁寧に答え、相手に伝わっていない場合は伝える側がさらに努力する必要があります。説明をしたからといって「それで済めばよい」というわけにはいかないのが、新しい ICT 教育やタブレットというツールの実情です。保護者の声を聞いていると、そのように感じます。

手打委員：今の話とも関連しますが、文部科学省のリーフレットにもあるように、家庭での注意点は「親子の会話が成立し、共有できる時間がある家庭」を想定しています。確かにそれが望ましいと思いますが、先ほど倉田さんがおっしゃったように、そうした対応が難しい家庭もあります。学校としてそのような家庭をどうサポートするかが課題の一つだと思います。また、和泉さんがおっしゃるように、ICT 教育の課題を繰り返し伝えていくことも必要です。結局、家庭との協力が欠かせませんが、現在の家庭の教育環境が十分でないという現状を踏まえた対応が求められていると思います。

倉田委員：学校から保護者に情報を伝えることは非常に重要であり基本だと思いますが、それを本当に共有できるかどうかは難しい問題です。学校が家庭の状況を把握し、適切に対応できるかどうかという点にも不安を感じています。

坂口委員：私も伝えることは大事だと感じています。説明用のリーフレットは毎年配布していますか。

総合教育研究所増沢学校教育政策監：初めて利用する方々や指針等を更新した

際には提供しています。

坂口委員：ありがとうございます。学校からは端末使用時の注意点が時々連絡されていると思いますが、情報の提供が十分かどうかは見えにくい部分があります。現代の家庭には学校のタブレット以外にもさまざまなデジタル端末が溢れており、その中でのトラブルも多く発生しています。その中で保護者は混乱し、不安を抱えることも少なくありません。なので、学校の端末の使い方に関するルール説明は重要ですが、無秩序なデジタル環境の中で子供たちがどう行動すべきかをモラル教育として低学年から丁寧に教える必要があります。また、それは子供だけでなく保護者にも伝わるような情報発信を継続し、家庭と学校が連携をとっていく教育が求められていると思います。最近、夏休みにサマースクールで児童たちに聞いたところ、中学生はほぼ全員がスマートフォンを所有し、小学生の高学年でも半数ほどが持っている実態がありました。学校には持ち込み禁止ですが、持っているケースが多く、トラブルも絶えません。家庭ごとの管理体制にもばらつきがあり、スマートフォンを介して SNS に動画をあげられたりする事案もあります。そうしたトラブルを防ぐためにも、学校のデジタル端末に限らず、包括的なモラル教育が必要だと強く感じました。

市長：先生方は保護者からの相談を受ける際、どのような内容でどのように対応されているのでしょうか。

総合教育研究所宮本（聡）指導主事：はい、宮本です。実際スマートフォンの使い方について、相談を受けることも多々あります。ただ、スマートフォンは私たちが支給しているものではないため、子供たちにどのように使ってもらうかを学校で話し合っています。買い与えているのは私たちではないので、子供たちに「どうしたら良いか、おうちの人と話し合おうか」とか、学校から家庭にルールを決めてもらうよう促し、学校に提出していただき、それを受けて三者面談で話し合うことなどもあります。

また、坂口委員のお話のように、保護者向けに ICT の使い方に関する講座を開き、外部講師を招いたりすることもあります。そうした講座には意識の高い保護者が参加されますが、本来聞いていただきたい保護者の方がなかなか来ていただけないこともあり、難しさを感じています。

久松学校教育審議監：付け加えさせていただきます。坂口委員がおっしゃったように、学校の端末だけでなく個人所有の端末も含めて、学校の情報モラル教育ではその使い方について指導しています。情報技術は日々進化しているため、毎年または現状に即した内容で情報モラル教育を継続して行う必要があると感じています。

市長：はい、ありがとうございます。少し申し上げたいのですが、今回の議論では子供たちのスマートフォン利用に話が及びましたが、そちらは情報モラル教育の重要な部分と認識しています。ただ、本日は ICT を使った学びに焦点を当てたいと思います。子供たちの ICT 活用に対する満足度や評価、使った授業と使わなかった授業の比較など、定量的なデータは把握されていますか。

総合教育研究所増沢学校教育政策監：全国学力・学習状況調査にはタブレット端末の使用に関する質問があり、どのような使い方をしているかという内容が多いです。ただし、満足度に関する質問項目は少ないように思います。

市長：なるほど。子供たちは日常的に使っていると思いますが、自分でどう感じているかを知ること重要だと思います。アンケート調査をするかどうかはわかりませんが。

森田教育長：振興基本計画作成時のアンケートでは、子供たちが「楽しく学べること」「授業にタブレットや AI を活用した最先端学習」「実験や校外学習などの体験的授業」を求める結果が出ています。

市長：なぜ子供たちはタブレットを使いたいのでしょうか。何かご意見はありますか。

総合教育研究所宮本（聡）指導主事：先ほどの説明にもありましたが、個別最適

化された学びで、自分が学びたいことを自分のやり方で選べる点が魅力だと思います。学び方の幅が広がり、決まった一通りの方法だけでなく複数の選択肢があることが良いのだと思います。

市長：先ほど和泉さんがおっしゃったように、「わからない」という声や、「使わないほうがいいのではないか」という意見もあります。一方で、もっと使うべきだと考える方もいます。そのギャップが大きいため、どの場面で注意しながら使うのかを明確に伝えることが重要だと思います。先生方も試行錯誤しながら工夫していると思いますが、今日の議論を聞く限り、市全体として具体的な話は明確な指針が十分ではないように感じました。それが不安を残しているのではないのでしょうか。例えば坂口さんもおっしゃったように、学年ごとに使い方は異なるはずですが、現状のガイドラインは簡潔すぎて、先生方が実際に対応するのは難しいと思います。学校現場では低学年ではできるだけ五感を使った学習を重視すべきだという意見もありますが、具体的にどの程度の総使用時間が適当か、どんな使い方は禁止すべきかはまだ明確になっていません。ICT を巡る保護者の不安は、身体的な体験が低下することに対するものだと思います。10 年ほど前に市長に就任した際に聞いた、絵本の中でスイミーが仲間と協力して「大きな目」になって敵を追い払う様子を動画で伝えるために電子黒板を使っているという ICT の利用の仕方は、良くない使い方だと思いました。本を読んで、行間を読んだり、想像を働かせるという余白の部分を ICT が奪ってしまっているのではないかと不安を持ちました。ただ、想像ができない子にとっては、その使い方は有効だとは思いますが、例えば、数学の展開図などはもっと ICT を導入すべきだと思っています。それで理解して学びが深まれば確実にメリットになるし、親和性も極めて高いと思います。しかし、今までおっしゃられた部分、特に低学年のうちに体験をデジタルに置き換えられる不安感を持っている保護者は多いのではないかと思います。先生方はアナログとデジタルをバランスよく組み合わせて努力してくれています

が、理想とする完成形はそれぞれ違うと思います。このような状況の中で、米マサチューセッツ工科大学（MIT）がチャット GPT を用いた実験を行い、AI を使ったグループは学習効果や脳活動が低下するという調査結果が出ています。OECD やユネスコも過度な利用に警鐘を鳴らしており、適切な使用時間と場面の設定はまだ確立されていません。こういった課題に対応することは教員にとって非常に大きな負担であり、明確な指針が必要だと感じています。

和泉委員：今後はデジタルとアナログの両方が重要になっていくと私も強く感じています。しかしながら、デジタル社会になっても 1 日は 24 時間であるため、使い方の順序づけが非常に重要だと考えます。年齢や内容、使用頻度、与える順番といった項目について、もっと具体的に活用方針を示すことが必要だと思います。そういった指針があれば、教員にとっても使いやすくなるのではないのでしょうか。

もう一つ申し上げますと、先ほど倉田委員もお話しされていましたが、私自身も AI について知らなければ将来やっていけるのか不安に感じています。もちろん、AI を使いこなせば大きなメリットがあるのも事実です。ただし、AI に使われないためには、自分が何者であるかを自分自身で問い、選択し続けなければなりません。つまり、AI の登場によって自分の身体や情緒の存在を強く自覚させられている気がします。

先日、10 代の若者たちに話を聞いた際、音声版チャット GPT の使い方を教えてもらいました。スマホで音声版チャット GPT と会話してみると、チャット GPT は名前を持っておらず、まるで「あなたは誰？」と問いたくなる感覚を受けました。AI には身体がありませんし、デジタルがなければ気づかなかった、自分の身体性や情緒の大切さを改めて認識させられる体験でした。若者たちはチャット GPT と話すことで温かさを感じていますが、その反面で自分の感情とは何かを考えさせられているとも言えます。

私たちはデジタル社会の次の段階にあり、新しい技術を使うことで何が起こ

るのか考えながら、体験や実体験の重要性を改めて意識していく必要があります。学校外や家庭でも子供たちはデジタルに触れているため、学校はデジタルから一時的に離れられる貴重な時間を提供する場となりつつあるとも感じます。そのため、AI に使われるのではなく、自分のペースで熟慮しながら選択できるような ICT の使い方が求められると思います。今回の会議で哲学的な視点に立ち戻り、なぜ使うのかという根本的な問いを常に振り返ることの重要性をお伝えしたいと思います。

市長：ICT の利用については「ICT でなければできないことがある時に使うべき」という考え方を聞いていますが、最近の授業などを見ていると、「ICT だとやりやすそうだから使う」という場合も多いのではないかと感じました。この考え方は全く違うと思っていて、ICT を使わなければできないことのために使うのか、単に便利だから使うのか、そこに明確な区別があると私は思います。この点について、どのように運用されているのか教えていただけますか。

総合教育研究所増沢学校教育政策監：増沢です。市長が述べられた通り、ICT 利用の目標は学習目標の達成に寄与する使い方をするということです。その点は方針にも明記しています。教職員がそうしたより良い使い方をできるようになることが非常に重要だと考えています。

市長：目標の達成に近づくのであれば、ICT を使うという理解でよろしいでしょうか。

総合教育研究所増沢学校教育政策監：はい。その通りです。ICT を使うことで、より深く学べる場合に活用するということです。

市長：なるほど。そのような理解でしたら、私も考えをアップデートいたします。

総合教育研究所増沢学校教育政策監：現在の議論の中で、体験の重要性について多くのご意見をいただいています。全ての学校が同様とは言い切れませんが、多くの先生方は体験を大切にされています。アサガオの例のように、例えばウ

サギについて辞書で調べるだけでは理解が浅く、実際に触れてみることで、その温かさやふわふわした感触など、様々な情報と結びついて深い理解が進みます。それらの実体験なども通してたくさんの関連情報と結び付け、概念形成をしていくような学びを教職員は進めていると思います。「自分の木」という取組では、子供たちが一年間かけて自分の好きな木を観察します。先生は五感を使わせるために、目・花・触れるなどのマークがついたワークシートを活用し、理科室の聴診器を使って木の内部の水の流れる音を感じ取らせるなど、体験を通じて深い理解を促進しています。写真を撮るのも学びの一環で、季節ごとに木の変化を観察し、命の循環について考える学びの機会となっています。家庭では、木の写真を撮るだけで終わりかもしれませんが、学校ではその写真を教材・学習資料として用い、学びをさらに深める役割を果たします。こういった学びの様子や成果を、学校と家庭間でどのように共有していくかも大切な課題だと感じています。これにより、部分的な情報だけで不安になることを避けられるのではないかと思います。以上が私の感想です。

市長：それでは、皆さんからも一言ずついただき、まとめに入ります。

総合教育研究所宮本（豪）指導主事：ありがとうございました。私は現場にいる頃から積極的に ICT を活用してきましたが、その際に最も大切にしていたのは、教師がどのようなねらいを持つかという点です。市長がおっしゃっていたように、「ICT だからできること」と、「ICT を使っても使わなくてもできること」があります。例えば、グループでまとめた意見を一斉に一画面で短時間に共有するのは ICT ならではの利点ですが、個人のノートを写真で撮って伝えるのは、実際に会って話した方が良い場合もあります。その際、もし教師のねらいが子供同士のコミュニケーションを重視するのであれば、直接伝えることを選択するでしょう。このように、教師が子供たちにどんな力をつけてほしいか、どう育ってほしいかを明確にした上で ICT を使い分けることが大切であり、その使い方を現場で目指し、それを全体に伝えて推進していきたいと

思いました。ありがとうございました。

総合教育研究所宮本（聡）指導主事：私は 15 年ほど前から ICT を利用しており、最初は「何でもできるから使いたい」という考えでしたが、子供の反応を見て適切な使い方を考え直しました。例えばアサガオの観察においても ICT は「鳥の目」で全体を見渡す視点であり、体験は「虫の目」で見られる視点なので、最初の体験をとってしまうとなかなかじっくりは見ないので、しっかり肌で触らせた後に深めていくことが大切だと思います。

教員は場面ごとにどう ICT を使うか学び続け、その細かなノウハウをどのように伝えるかが課題だと思いました。本日の話を受けて、新たな視点を得られたことに感謝しています。子供たちのために何ができるかをこれからも考えてまいります。ありがとうございました。

久松学校教育審議監：私はこれまでどちらかというと ICT を使わないタイプの教員でした。反復練習を中心に指導してきたのですが、なかなかできない子供もいました。ICT を使って自分の動きを見せたところ、少し技能が向上した経験があります。そのため、ICT の効果的な活用は、教員がどのように使うかを理解した上で、それぞれの子供に最適に対応することが重要だと考えています。全てを一律に使うのではなく、バランスよく取り入れていく方法を今後学校とともに考えていきたいと思っています。ありがとうございました。

森田教育長：教育委員会の立場から ICT を考えてきましたが、本日は外部の方の見方を知る良い機会でした。本日いただいた ICT に関しての不安や疑問がある中で、丁寧な情報発信が必要だと改めて感じました。私も ICT だけで伸ばせばいいとは考えていません。教室では ICT を補助的に使うことで、子供の気づきが増え、学びが深まると考えています。ガイドラインについては、望ましい活用例を多数発信していますが、望ましくない使い方についても整理して伝えていくことが、より詳細なガイドライン作成につながると思います。

一方で、学校では AI や ICT を使わない空間にするという考え方には懸念があります。家庭で使われている中で、学校で正しい使い方を学べないと正しい知識を身に着けることができる場所はないのではないかと思います。例えばですが、自動車学校に行かずに車を勝手に運転してしまっているような危険性があると思います。学校はルールや適切な使い方、よりよい活用方法などを体験させる重要な場です。これらを踏まえ、保護者にも正しい情報発信を行っていきたいと考えています。ありがとうございました。

市長：ありがとうございました。準備や視察などご協力いただいた皆様に感謝します。終わりのない議論ではありますが、本日の意見交換や森田さんからの具体的なアクションも含め、良い議論ができたと思います。今後ともよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

事務局（教育総務課）：長時間にわたり、ご協議いただきまして、ありがとうございました。次回開催は、9 月 28 日、教職員の働き方改革を議題に開催する予定となっております。皆様お疲れ様でした。

令和 8 年度(2026 年度)第 2 回つくば市総合教育会議次第

日時：令和 8 年(2026 年) 8 月 21 日 (金)

午前 9 時 00 分から午前 11 時 00 分まで

場所：本庁舎 5 階 庁議室

1 開会

2 議題

ICT教育について

3 閉会

事務局：教育局教育総務課

つくば市総合教育会議 構成員名簿

職 名	氏 名
市 長	五十嵐 立青
教 育 長	森田 充
教育委員会委員	倉田 廣之
教育委員会委員	和泉 なおこ
教育委員会委員	坂口 まり
教育委員会委員	手打 明敏

つくば市版 ICT 活用方針

つくば市総合教育研究所

1 ICT 活用の基本的な考え方

・ ICT は目的が先、活用は後

学習指導要領や学校教育目標から「何を学ぶか」「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」を明確にし、ICT はその実現のための手段として位置づける。

・ 情報モラルを育みながらの ICT 活用

情報発信が他者・社会に与える影響を考慮すること、自他の権利（プライバシー、著作権など）を尊重すること、危険な情報を見分け身を守ること等を含む情報モラル教育を行いながら ICT を活用する。

・ 実体験を伴う学びを基盤とした学びの広がり・深まり

（アナログとデジタルの最適な組み合わせ）

手で書き、他者と対話し、本物に触れる「実体験を伴う学び」を基盤とし、その上で ICT で学びを拡張する。

・ 子供の自己決定を尊重する活用

目的に応じてアナログかデジタルかを選択できる力を育み、情報の収集や整理・分析、情報発信などに対し、学び方を自己決定しながら主体的に学べるようにする。

2 ICT 活用の留意点

(1) 授業をデザインする上の留意点

・ 学習負荷への配慮

児童生徒の学習負荷を増やさないよう、Microsoft365、スタディノート、インタラクティブスタディの活用を基本とし、操作が複雑なアプリや目的に合わない機能の使用は避ける。

・ ICT の強みを生かした活用

個別最適、情報の可視化、意見等の比較・共有・保存、疑似体験、遠隔参加などの場面で、ICT の強みを組み込む。特に、情報共有を通じた意見の練り上げや共同編集などを通して、協働学習の質を高める。

・ 授業改善と評価に生かす ICT 活用

クラウド活用で児童生徒の学習状況や理解度を即時に把握し、形成的に評価して授業改善に生かす。また、デジタルでの成果物（デジタルポートフォリオなど）を学習評価に適切に組み入れる。

・ 個別最適と協働の両立

孤立した学び（自己完結の学び）や埋没した学び（個の思考等が集団に埋もれる）に陥らないように、個別と協働での学びの往還を ICT 等で設計する。

・ 生成 AI は活用前に特徴を学習

児童生徒が生成 AI を活用する際には、事前に生成 AI の仕組みや限界、著作権、プライバシー、バイアス等の問題について学ぶ機会を設ける。そして、「生成 AI 自体を学ぶ場面」「使い方を学ぶ場面」「各教科等の学びで用いる場面」の3つの場面を組み合わせたり往還したりしながら、効果的な場面に限って活用する。

※文部科学省「初等中等教育段階における生成 AI の利活用に関するガイドライン（令和6年12月26日）」を参考にする。

(2) 児童生徒の発達段階に応じた留意点

・ 発達段階に応じた ICT 活用の調整

児童生徒の発達段階に応じて、使用時間、場面、内容を調整する。視力や姿勢、睡眠など健康への影響についても十分配慮する。また、過度な利用が依存や生活リズムの乱れなどの悪影響をもたらすことを児童生徒・保護者に啓発する。

特に、前期ブロックでは操作の負荷を最小限にし、紙での読み書きや身体を使った活動を大切に

する。

中期ブロック以降は、情報の整理・表現・協働のための ICT 活用を段階的に広げる。

後期ブロックでは、情報の信頼性判断やデータ活用など、より高度な情報活用能力育成へとつなげる。

・ ICT による合理的配慮

困り感を抱える児童生徒の特性やニーズを把握しながら、音声入力や音声読み上げ、カメラ機能による板書の記録など、周囲の理解を促進しつつ学びやすい環境を整える。

・ 自分事の情報モラル教育の実践

児童生徒の日常でのネットトラブルや「他人の写真を無断で SNS 等に投稿してはいけない」「自宅周辺の写真から住所が特定される危険」といった身近な事例に基づいた学習を行うなど、自分事として捉えられる情報モラル教育を展開する。また、道徳やつくばスタイル科などの年間指導計画に情報モラル教育を位置付けるとともに、家庭と連携しながら日常的に学習する。

(3) 運用・安全面の留意点

・ 個人情報の保護

個人情報漏洩を防止するためのルール（つくば市セキュリティポリシー）の確認と事例研修等を計画的に実施する。

・ 端末の安全な利用

「学習者用端末持ち帰り活用のルール」の文書や「教育活動における生成 AI の利用について」のリーフレットなどを学校・家庭で共有する。

・ 教員の校務負担軽減

テンプレートや教材の共有を図るとともに、CBT や生成 AI も活用する。

3 学校・家庭・地域との連携

・ 端末利用に対する家庭との共通理解

家庭学習での端末利用の目的（シームレスな学びなど）や有効な活用法を共有し、過度な使用を防ぐ。

家庭での学習課題を課すときは、家庭での ICT 環境を把握し、必要に応じてオフラインでも取り組める代替手段（紙のプリントなど）を用意する。

・ ICT で広げる地域との学び

地域教材のデジタル化、地域人材とのオンライン連携など、学びの広がりを生み出す。

・ コミュニティ・スクールでの合意形成

ICT 活用の方針や ICT 活用に関する課題を学校運営協議会で共有し、学校と地域で共通理解をつくる。

学習者用端末の活用にあたり ご家庭で気をつけていただきたいこと①

□ 端末を使うときの健康面の注意点について

端末を使うときの健康面でのポイントを、本人の習慣として身につけられるよう、学校でも指導しますが、特に低年齢のお子さまの場合などは、保護者の方にも気にかけていただけると効果的です。



注意点！



① 目を、画面から30cm以上、離して使う

☞ そのためには、良い姿勢を保つことが重要です。お子さまの成長に応じて、机と椅子の高さを正しく合わせることも必要です。

② 30分に1回は、20秒以上画面から目を離して、遠くを見る

③ 部屋の明るさに合わせて、画面の明るさを調整する

☞ 一般には、夜に自宅で使用する際には、昼間に学校の教室で使用する際よりも、明るさ（輝度）を下げます。

☞ 画面の反射や画面への映り込みを防止するために、画面の角度も調整します。

※ ①や②は、紙の本や資料を読む場合でも重要です。

ご家庭で気をつけていただきたいこと②

□ 端末の利用時間等のルールについて

ご家庭で過ごす時間全体の中で、ご家庭で用意したデジタル機器も含めて、端末を、いつどのように使うか、お子様と話し合うことが大切です。



<最低限、守っていただきたいこと>

- ・少なくとも、寝る1時間前からは、デジタル機器の利用を控えるようにします。

☞睡眠前に強い光を浴びると、入眠作用があるホルモン「メラトニン」の分泌が阻害され寝つきが悪くなります。

- ・学校で配られた端末は、学習に関係ない目的では使いません。

健康面に気をつけて使う場合でも、デジタル機器を使う時間があまりに長くなると、人とのリアルな関わり合いや、自分の感覚や行為を通して理解する学習、地域社会での体験活動などの時間も、少なくなってしまうです。

成長期のお子様のバランスの良い発達の観点からも、（使い方にもよるため、一概に何時間までならOKということはいえませんが）、お子様がさまざまな経験や活動ができるよう、ご家庭でもデジタル機器全般の使い方について、この機会にお考えください。

□ 端末の安全な利用について

お子様のインターネット使用時や、スマートフォンを持たせる際には、インターネット上の犯罪等の被害者や加害者にならないようにするなど、適切な指導が必要です。

☞フィルタリングは、お子様にとって不適切な情報へのアクセスを遮断したり、インターネットでのトラブルを防いだりするのに役立ちます。

ご家庭で用意するデジタル機器に、携帯電話会社などが提供するフィルタリングサービスを活用することについてもご検討ください。

